

武蔵野市
中高生世代ワークショップ

Teens ムサカツ

令和6年度
武蔵野市 中高生世代ワークショップ
「Teensムサカツ」事業報告書



令和6年度
武蔵野市 中高生世代ワークショップ
「Teens ムサカツ」事業報告書

もくじ

第1章 事業概要	4
第2章 各回の記録	10
第3章 提言まとめ	24
第4章 事業の実施結果と振り返り	32
第5章 人材育成	38
第6章 参考資料	41



第1章 事業概要

1. 事業目的

■ 中高生世代ワークショップ「Teens ムサカツ」は、将来を担う世代が市政や地域活動等に関心を持ち、市の施策に関する理解を深めたり、自分たちの世代向けの事業についての提言を行ったりできる場をつくることを目的とした事業である。令和5年4月に施行された「武蔵野市子どもの権利条例」では、子どもが「意見を表明し、参加する権利」(第3条及び第17条・第18条)が定められており、中高生世代の意見表明及び参加の権利を実質的に保障するための施策として、本事業は重要な役割を担っている。

■ 本事業は、武蔵野市が平成29年度より実施してきた(平成29年度および平成30年度は「中高生世代広場」という名称で実施)。令和5年度～6年度は、特定非営利活動法人文化学習協同ネットワーク(本部:東京都三鷹市)が本事業を受託・運営した。なお、令和5年度は子ども家庭部子ども子育て支援課が所管であったが、令和6年度より子ども家庭部児童青少年課に移管された。

■ 令和6年度は、『「こんなまちになったらいいな」を市政に』を年間テーマに設定した。令和5年度は「中高生世代の居場所」を年間テーマとして設定したが、その議論を引き継ぎながらより幅広いテーマをワークショップ内で扱うために、令和6年度は「まち」を年間テーマに設定した。

■ プログラムを立案するにあたり、以下の4点を重視した。

1. 「武蔵野市子どもの権利条例」を踏まえて、中高生世代の具体的な願いや要求を明らかにしていくこと

本事業の参加対象である市内在住・在学の中高生世代が、「まち」に対して感じている願いや課題感、「まち」に関わったり参加したりする上で感じているハードルなどを明らかにしていくために、「武蔵野プレイス」「商店街」「地域イベント・地域活動」など、参加者にとって身近と思われる「まち」との接点から年間テーマにアプローチした。

2. 安心・安全な話し合いの場をつくること

ファシリテーターと参加者との信頼関係づくりや、参加者相互の応答的な関係づくりを行うために、単発のワークショップではなく、前年度同様に全6回の継続的なワークショップで内容を構成した。参加者が継続して参加しやすい時期・日程を再検討し、各学校の行事やテスト期間が重なる9月・10月を避けるとともに、全体の期間を前年度の7ヶ月間(8月～3月)から3ヶ月間(11月～2月)に短縮して実施した。

3. 「自分たちの声によって、状況が変わるかもしれない」という体験を通して自己効力感を高めること

「自分たちが声をあげる、動くことで、状況が変わるかもしれない」という体験は、参加者自身の自己効力感を高めること(エンパワメント)につ

ながり、事業終了後も参加者が継続して市政等に関わっていくことを後押ししていくと考えられる。そのため、まずは前年度の参加者を対象とした「Teens ムサカツ同窓会」を8月に実施し、前年度の市政提案に対して市からフィードバックを行う場を設定した。今年度のプログラムにおいては、最終回に設定した「市政提案会」にて、提案を一方的に市政に「伝える」だけでなく、市関係者と意見交換を行うことができる時間を十分に確保し、具体的な「応答」をもらえるような工夫を行った。また、新しい取り組みとして、提案づくりのプロセスにおいて、参加者自身の願いや課題感をもとに、チームごとに地域で「アクション」を実施し、テーマに対する理解や提案内容をより深めるとともに、「自分たちが動くことで地域社会に影響を与えられる」という具体的な体験につなげることをねらった。

4. 「声を聴かれにくいこども・若者*」の声を集める工夫を設けること

中高生世代の意見表明及び参加の権利を広く保障していくためには、公募型ワークショップには参加のハードルがあることも踏まえて、本事業を通して権利の普及・啓発を行っていくことも重要である。そのため、本事業報告書とは別に、活動の様子を中高生世代に分かりやすく伝えるための「市民向け冊子」を作成して、市内の青少年が集まる居場所等に配布を行った。

詳しくは、こども家庭庁の「こども・若者の意見の政策反映に向けたガイドライン」を参照。

2. プログラム概要

■ 令和6年度は『『こんなまちになったらいいな』を市政に』を年間テーマとし、以下の通り全6回のプログラムを実施した。

第 1 回 日時 11月24日(日) 13:30～16:30 場所 武蔵野市役所 概要 オリエンテーション - 年間テーマ及びプログラム概要を伝えた。 - 次回フィールドワークに向けて、互いの興味関心を出し合った上で、訪問先の基本情報や市の関連施策について理解を深めた。

※ アクション準備については、第3回の時間内だけでなく、アクション実施日までの期間に、チームごとに対面及びオンラインにて準備会を行った（詳細は14-15ページを参照）。

■ 上記、本体プログラムとは別に、令和5年度修了生を対象として「ムサカツ同窓会」を8月22日(木)に実施した。詳細については、本章8-9ページに記載している。

3. ワークショップ参加者について

■ 本事業の対象・広報については以下の通りである。

対 象	広 報
対 象 者 武蔵野市在住または在学の中高生世代 参 加 者 数 32人／定員30人程度 ※ 参加者の構成 - 中学生年代: 12名、高校生年代20名 - 在住・在学の比率は約半数ずつ - 過去のムサカツ事業参加者: 7名	周 知 方 法 市報、市HP、市公式SNS(LINE, X, Facebook)、むさしのFM、チラシ配布 チラシ配布場所 - 全市立中学生(タブレット端末へのデータ配信) - 市立以外の市内中・高等学校 - 市関連施設(図書館等)

※ 定員30名程度(申込順)のところ、応募が35名に達した時点でプログラム構成上、募集を締め切った(その後、辞退者等が出たことから、最終的な参加者は32名で確定)。

4. 運営体制について

■ 実施団体において、事業統括責任者1名および運営事務局4名の実施体制をつくり、年間プログラムを企画・運営した。ワークショップ実施にあたっては、市担当課と毎回事前に打合せを行い、ワークショップの進捗および参加者の様子を共有した上で、ワークショップ内容を協議し決定した。

■ 各回のワークショップ全体を進行する「メインファシリテーター」は、事業統括責任者および運営事務局職員が担った。実施団体が運営するフリースクール事業等において、中高生世代と関わってきた経験が豊富な職員を配置した。また、小グループにおける話し合いを補助する「グループファシリテーター」として、実施団体が大学生等を募集し、配置した。実施団体職員よりも参加者と年齢の近い大学生等が話し合いのサポート役を担うことで、参加者との関係づくりや意見を言いやすい雰囲気をつくることを期待した。なお、グループファシリテーターのファシリテーションスキル向上のため、以下の取り組みを実施した。

・ 1グループに複数のファシリテーターを配置し、相互の気づきを促すこと

・ 実施団体職員を2名グループファシリテーターとして配置し、必要に応じて助言等を行うこと

・ 初回から段階的に役割を広げ、徐々に大きな役割を担ってもらうこと

・ 事前および事後の振り返りを丁寧に行い、関わりを振り返る機会をもつこと

・ 「ファシリテーション研修」を1回実施し(詳細は第5章に記載)、ファシリテーションに必要な基礎的な視点および姿勢を身につけること

■ グループファシリテーターの構成は以下の通りである。

グループファシリテーターの構成		
大学生……………6名	合計 11名	
大学院生……………1名		
社会人(20代) ……2名		
実施団体職員……………2名		

※ 大学生・大学院生のうち3名は、実施団体が運営するフリースクール事業や学習支援事業にボランティアとして継続的に関わっている学生である。なお、過去のTeensムサカツ参加者(現在は大学生)が1名参加した。

■ 毎回実施前に、事業責任者、運営事務局職員、およびグループファシリテーターで、事前ミーティングを行い、各回の目的やワーク内容、各グループの参加者構成等を確認・協議した。また、実施後の振り返りミーティングでは、各グループでの話し合いの様子を細かく共有するとともに、参加者一人ひとりの様子を共有し、「安心・安全な話し合いの場」をつくるために、どのような関わりが必要か、ファシリテーターとして大事な視点を検討・共有した。

■ 参加者との連絡手段として、メールに加えてLINEオープンチャット機能を活用した。登録は任意とし、事前連絡等は両方とも活用したが、最終的には参加者全員がオープンチャットに登録をした。

Teens ムサカツ 同窓会

日時 2024年8月22日(木)

場所 武蔵野総合体育館 大会議室

時間 13:00～15:30(終了後、16:00～17:00で交流会を実施)

参加者 9名(参加対象である前年度修了生は26名)



実施目的

前年度(令和5年度)の提案内容をまとめた「市民向け冊子」を運営事務局から共有する。

前年度(令和5年度)の市政提案に対するフィードバックを市からもらい、「自分たちの声が市政に届く」「自分たちの声で小さなことでも状況が変わっていく」という体験につなげる。

「参加者同士の交流の機会がほしい」という前年度の声も踏まえて、修了生同士が交流できる時間をつくるとともに、今後も市政に関わっていけるようなきっかけづくりを行う。具体的には、今年度のTeens ムサカツの告知および募集を行う。



実施プログラム

1. 提案内容の振り返り

前年度の提案内容をまとめた「市民向け冊子」を読み合い、まずは自分たちの提案内容を思い出した。

2. 市政提案へのフィードバック

市政提案会での中高生からの提案に対して、市からの回答をもらった。令和5年度は子ども子育て支援課が担当していたが、令和6年度からは児童青少年課へ所管課が変わり、同窓会には児童青少年課の他、子ども子育て支援課、秘書広報課から合わせて6名の市職員が参加し、それぞれの提案内容(各課から回答をもらうにあたり、提案の背景や趣旨については運営事務局で補足した)に対しての回答を示してもらった。その後、2グループに分かれて、フィードバックを受けての感想交流や、それを踏まえての意見交換を市職員も交えて行った。

3. 交流会

全体プログラム終了後は、参加者同士が自由に交流できる時間とした。持ち込んだカードゲームを使いながら、交流を深めた。



参加者の振り返りアンケートより

終了後に「振り返りアンケート」を実施した(回答数n=9)。「全体的な満足度」は、「満足」が5名、「やや満足」が3名、「どちらとも言えない」が1名だった(「やや不満」「不満」は0名)。以下、「フィードバックに関して」(自由記述)の項目からコメントを抜粋する。

- 正直、提案の中で1つくらいは進展、実現しているんじゃないかな～、とは思っていたけど、「検討」ばかりが目につき、少し残念だったし、厳しさが分かった。だが、私が思っていたこと(ヨドバシ裏のことなど)が市でも解決しようとしていることが分かって良かった。
- 検討をたくさんしていただけるのが分かって良かった。しかし、見直しのタイミングが遠くて、その時には提案した私たちは大学生なのかと思った。また、自分が〇〇をしてほしいと提案

しても、それが実現する頃には、自分が対象ではなくなってしまうかもしれないということ、今じゃないかもしれないということだと声をあげにくくなってしまいうやめんどくさくなってしまいう人もいるのかなと思った。

- 自分たちが出した提案に市からの回答が得られたので良かった。あいまいなところもあったが、私たちの考えにしっかり向き合ってくれたのではないかと思った。自分たちの意見を伝えるだけでなく、それをふまえた市からの返答も聞けて良かった。
- フィードバックには早いかなとは思いました。フィードバックの内容は「まあさうだろうな」という感じでした。

小グループでの意見交換より

コミュニティセンター(コミセン)の活用について

「コミセンの施設予約をwebでできるようにする」という提案から、中高生世代がコミセンに感じている課題についての話題になった。「中央コミセンは使っている人が若いので、使いやすい。最近改装工事がされて雰囲気も明るい。」「西コミセンは小さい頃は行っていたけど中学生になって行っていない。使っている人の年齢が上すぎる。やっぱり中高生がいないところには中高生は行きづらい」などの声があがった。市職員からは「コミセンの運営は市がコミュニティ協議会に委託する形だが、地域のボランティアの人たちと一緒に作ってきたのがコミセンの形。使っている

人は、年代がみんなより上の人が多いが、コミセンを作る協議会のメンバーに若者世代が入ると変わっていくかもしれない。協議会によっては大学生が運営委員に入っている。」と応答があった。

中高生世代に届く広報について

秘書広報課職員からは「どうやったら中高生世代に情報が届くか?」という質問が投げかけられた。中高生からは、「使いたいと思った場所は、Web検索やGoogleマップで調べる。例えば、学習室、自習室など。内観が分かると使いやすい」「中高生がSNS運用に協力するのもあり。大学生でもそういう勉強(広報などの勉強)をしたい人もいるかもしれない。」などの声があがった。



第2章 各回の記録



第1回

出会う 参加者同士の交流とフィールドワーク準備

日時 2024年11月24日(日)
場所 武蔵野市役所 412会議室
参加者 27人
講師 重岡 秀俊 さん(Meetむさしの)

実施プログラム

1.事業概要説明

Teensムサカツの概要を武蔵野市担当課(児童青少年課)より、今年度のテーマや1年のスケジュールを事業受託団体である特定非営利活動法人文化学習協同ネットワークより説明を行った。

2.アイスブレイク／インタビュー講座

講師:重岡秀俊さん(Meetむさしの)

次回実施するフィールドワークに向けて、より実りある聞き取りが行えるように準備すること、また参加者同士が知り合う機会となるように、「聴く」ことを意識し実践するワークを実施した。



3.フィールドワーク事前準備

今年度のプログラム実施に当たっては予め3つの小テーマを設定し、参加者のグルーピングを行った。

- ・ あそぶ・まなぶ(中高生世代の居場所について)
- ・ くらす・はたらく①(地域活性化、まちの賑わいについて)
- ・ くらす・はたらく②(地域活動、多世代交流について)

上記の3テーマに関わる武蔵野市役所各課から示された、予めおさえておくべき施策やポイントを聞いたうえで、フィールドワーク先やゲストの方についての基本情報についても知る時間を設けた。その上で、参加者それぞれがテーマを選択した理由や関心を共有しながらフィールドワーク先で質問したいこと、注目すべきことを整理した。

実施目的

Teensムサカツのテーマや概要を理解するとともに、参加者同士が年間を通じて集い、提案を作る仲間であるという意識を持ってもらう。テーマに関わる事前知識を得ながら、個々の問題意識や興味・関心を言語化し、整理する。

所感

昨年度と比べ、私立高校在学の参加者が多い参加者分布となった。アイスブレイクやインタビュー講座を通じ参加者同士が知り合う機会作りを行うことを一義としながら、次回実施するフィールドワークに向けた準備も行った。運営側の印象としては、年齢層が高い分意思疎通が図りやすく自分の意見も積極的に出てくる一方で、市内在学である参加者が多いことで市内在住であれば伝わるような情報についても丁寧に確認をする必要性を強く感じる回となった。

第2回

知る・学ぶ

フィールドワークと振り返り

日時 2024年12月8日(日)

場所 武蔵野商工会議所 市民会議室ゼロワンホール
及びフィールドワーク受入施設

参加者 20人

実施目的

大テーマ「こんなまちになったらいいな」及び3つの小テーマについて、市内の実態を知り、今後のアクションや提案作成に向けた情報収集や多様な視点に出会う機会をつくる

所感

前年度は、参加者の興味関心をプログラム内で言語化し、それに合わせたフィールドワーク先を検討したが今年度はプログラム構成の都合上、第1回実施前にテーマを提示して取り組むテーマを設定した上でフィールドワーク先も事前に決定していた。3グループに分かれたフィールドワークは、午前に2グループ、午後に1グループがそれぞれ市内各所で施設見学やゲスト講話を行った。午後にフィールドワークを実施したグループは時間の都合上振り返りを行えなかったことはもちろん、午前にフィールドワークを実施した2グループについても午後のプログラムには参加できず振り返りを行えない参加者が多く、今後の進行に不安が残る回にはなったものの、施設や取り組みの実際を知ることによって前回の課題として残った「市内情報の知識不足」についても一定の補完を行うことができた。

実施プログラム

1. フィールドワーク

A: あそぶ・まなぶ(施設見学)
→ 武蔵野プレイス(公益財団法人武蔵野文化生涯学習事業団・矢澤さん)

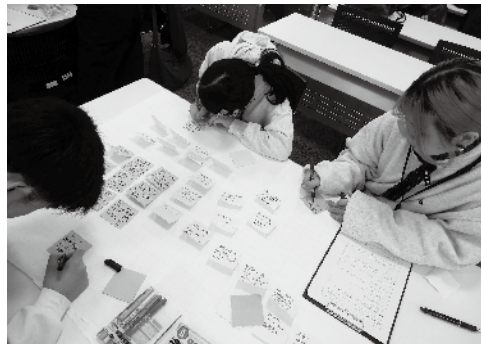
B: くらす・はたらく①(ゲストによる活動紹介)
→ 舟木さん(MIDOLINO_ / グリーンパーク商店街)

C: くらす・はたらく②(施設見学及びゲスト講話)
→ 吉祥寺北コミュニティセンター運営委員(村松さん、小宮さん、三根さん)、青少協桜野地区委員(後藤さん)

2. グループワーク

※午前中にフィールドワークを行ったA、Cグループはセッションを実施したが、Bグループは午後にフィールドワークを実施したためセッションは実施していない。

施設見学やゲスト講話を経ての気づきや感想を共有し、参加者視点での課題やアイデアなど出し合いながらアクション実施に向けた基礎作りに取り組んだ。



フィールドワーク各グループ詳細

Aグループ「あそぶ・まなぶ」

「あそぶ・まなぶ」がテーマのAグループは武蔵野プレイスでフィールドワークを行った。当日は6名の参加者が参加し、まず4階から地下2階までの施設を見学した。

中高生にとって「プレイス」といえばB2Fにあるスタジオラウンジが有名で、「プレイスに行ったことがある」=「スタジオラウンジを使っている」という感覚の方が多い。この日も多くの中高生が利用しており、とても賑やかな雰囲気だった。その中で、B2Fにある3つのスタジオ(クラフト・パフォーマンス・サウンド)につ

いても見学した。スタジオラウンジと違い、スタジオは低価格ながら有料となっており、使うためには予約をしなければいけないこともあり、参加者たちからも「知らなかった」との声が聞かれた。

見学後は、武蔵野プレイスの矢澤さんより「武蔵野プレイス」について青少年施設としての成り立ちや抱えている課題について説明してもらった。前回、フィールドワークに行くにあたって質問したい事柄を話し合っていたため、質疑応答の時間にも参加者たちから積極的に質問が出ていた。



Bグループ「くらす・はたらく①」

Bグループは9名の参加者が、武蔵野中央地区商店連合会のグリーンパーク商店街で様々な取り組みを仕掛けている舟木一郎さんにお話を伺った。

「そもそも商店街は必要なのか?」という投げかけから始まった舟木さんのお話は、グリーンパーク商店街の成り立ちと現状、舟木さんが取り組まれているシェアキッチンや地域食堂、「MUSASHINO MIDTOWN」という名称の元で行われている様々な催事についてご説明をいただいた。

普段商店街を使う機会が少ない参加者

たちにとっては、買い物をするのは大型スーパーなどが主流。それでも商店街が賑わっていると活気があるイメージはある…そもそも人通りの少ない、駅から離れた場所に人が訪れる余地はあるのかが拭いきれない疑問だった。

「個性のあるお店が持つ特別感」「商いは会話」「利用しやすい‘言い訳’のデザイン」など馴染みのない言葉も含め様々なお話から、さらにモヤモヤが深まったり新鮮味を感じたり多様な感想を得る機会になった。

Cグループ「くらす・はたらく②」

「くらす・はたらく」の中でも「地域活動」を最初の入口としたCグループは、吉祥寺北コミュニティセンター(以下、北コミ)を会場に、北コミの運営委員を担う大学生の村松さん、三根さん、小宮さんの3名と、青少協桜野地区の後藤さんから、お話を伺った。当日は4名の参加者が参加して、北コミの施設を案内してもらったあとに、活動内容や地域に関わったきっかけ、地域の課題など、前回自分たちで考えた質問をしていった。後藤さんからは、地域との接点について、子どもの頃はお祭り等のイベントに参加する機会があるけれど、高校生年代以降になると、なかなかつながり方が難しいというお話もあった。その中で、中高生になっ

たときに、今度は自分が参加したイベント等の「運営側」として参加できる取り組みがあることも紹介してもらった。また、「まずは自分自身が楽しく関わって、それが周りにとっても“いいこと”になるといいよね」というお話もしてもらった。北コミ運営委員の3人からは、北コミに関わるきっかけとして、子どもの頃に地域で遊んだ思い出があったことや、ロビーでの勉強や大学の活動で北コミを使っているうちに「声をかけられた」というエピソードなども話してもらった。前回は漠然と「地域」として語っていたのが、具体的な「人」や「場所」をイメージしながら話せるようになったフィールドワークであった。



第3回

動くvol.1
アクション作成・準備

日時 2024年12月22日(日)
場所 武蔵野プレイス
フォーラム
参加者 24人

実施目的

前回の欠席者を含めて、フィールドワークの内容共有と振り返りを行った上で課題や関心を言語化する
前述の課題や関心、フィールドワークで提供してもらった「アクションの種[※]」をもとにアクションを実施するチームをつくる

所感

第2回のフィールドワークにおいて振り返りを行うことが出来なかったグループ、欠席者に対するフォローを行う必要性があった。
企画作りに関しては、伴走する運営側のキャパシティから各グループが2分割の最大6チームとし、結果的に6チームに分かれて動き出した。しかし大枠では興味・関心が同じでありながら個々人で細かな差異があったり、そもそも企画を作ることに慣れていない(加えて当初想定していた終日をかけてのアクション作成が行えなかった)ことで、6チーム中5チームが追加の準備日を設定し年末年始にかけて取り組み作りを行うことになった。話し合いを行う上での伴走を行う「ファシリテーター」とアクションを企画するという役割には大きなギャップがあり、グループファシリテーターにとっても大きな負担となってしまったことは課題として残った。

実施プログラム

1. グループセッション

第2回のフィールドワークに参加出来ていない参加メンバー及び振り返りが出来ていないBグループのフォローを行う必要もあったため、改めて施設見学やゲスト講義を経ての気づきや感想を共有し、参加者視点での課題やアイデアなど出し合いながらアクション実施に向けた基礎作りに取り組んだ。

2. グループワーク

フィールドワークの際に分かれた【あそぶ・まなぶ】【くらす・はたらく①】【くらす・はたらく②】の3つのグループをもとに、参加チームの感じた課題感や興味関心から6つのチームを作り、具体的なアクションを企画した。
企画作成においては、運営側で企画書のテンプレートを提示し、以下の項目に沿って具体化を行った。

—
テンプレート内容

【実施概要】【実施目的】【実施予定日時】【実施会場】【参加対象】【実施スケジュール】【準備物】【広報】【実施における役割分担】など。

この実施日に企画書を埋めきることが出来なかったチームは、実施予定日までにオンライン及び対面による準備日を設定し、アクション前の準備を進めた。



※ フィールドワーク先で、施設や催しを生かして中高生が取り組みそうなことを伝えてもらうことでアクションをイメージする材料とした

第4回

動くvol.2
アクション実施

日時 2025年1月
場所 市内各所
参加者 22人

実施目的

参加者自身で企画したアクションを形にし、実施してみることで実施前後での様々な変化を体感する
自らが主体的に「動く」ことの必要性は勿論、行動してみることに伴う難しさや課題についても知る

実施アクション

あそぶ・まなぶ

チーム①:バレンタイン大作戦
チーム②:Study Oasis



くらす・はたらく①

チーム①:ボードゲームdeあそぼ!!!
feat.美しきイルミネーション!!!!!!
チーム②:地域食堂お手伝い計画



くらす・はたらく②

チーム①:カジュアルムサカツ
チーム②:ハッピー?ラッキー!?クッキー!!!
~多世代交流しよう~



所感

追加の準備日も踏まえてそれぞれのアクションを実施し、全てのアクションが頓挫することなく無事に終了した。
「自分たち自身が動いてみて得られた変化や難しさ」を体感してもらうべく今年度導入した本プログラムは、年末年始にかけての準備～模試や試験と重なる1月中の実施ということもあり、準備からアクションまでを一貫して経験した参加者は必ずしも多くはなかったものの、一連の取り組みを通して参加者同士の関係性は目に見えて強まったと感じられる。
実際に動いてみることで願いを実現できる受け皿を求める参加者がおり、その必要性は実感する一方でそうした受け皿を担うのが本事業の役割なのか、伴走する我々がどこまで関わるべきなのか課題も残る。

アクション報告 | あそぶ・まなぶ

チーム①

バレンタイン大作戦

日時 2025年1月12日(日)
時間 第一部:13:00~14:30/第二部:15:30~17:00 ※
場所 武蔵野プレイス B2フロアクラフトスタジオ

※ 第一部と第二部は同じ内容を実施

模造紙まとめ

バレンタイン大作戦♡		
自分たちの問題意識(問い)	(青少年フロア) 休憩も自習もできるプレイスB2Fの魅力が伝わりきれない。	
アクションの目的と根拠	目的 → プレイスの魅力を伝える。 (クラフトスタジオ)	概要 → お菓子作り、アイスブレイク交流を通して、プレイスの魅力の宣伝をする。
アクション実現のために必要だった資源(人、場所、もの、予算、広報、etc)	場所…武蔵野プレイス(B2F クラフトスタジオ) もの…調理器具、お菓子の材料、ラベリング材料 予算…プレイス使用料、材料費 広報…Instagram	
目的に対してできたこと できなかったこと	できたこと ①プレイスの魅力を伝えるイベントができた。 ②アイスブレイクを通して、参加者同士の交流ができた。 ③アイスブレイクを通して、参加者同士の交流ができた。	できなかったこと ④アイスブレイクを通して、参加者同士の交流ができた。 ⑤B2Fの魅力を伝えるためのチラシが足りない。 ⑥B2Fの魅力を伝えるためのチラシが足りない。
その理由	①プレイスの施設概要の説明の時間を設けることができた。 ②計画通りに進行することができた。 ③行動するには準備が必要だから。 ④可視化されていないから。 →フロアマップやサイトに記載されていない。	
同じ理(よ)うな原(はら)いを持つ中高生世代へ一言	分からないことがあったら、 周りの人に聞こう!	

当日までのプロセス

- ① フィールドワークの中で武蔵野プレイスB2フロアにあるスタジオ(クラフト・サウンド・パフォーマンス)はあまり認知されていない現状を聞き、スタジオについて多くの人に知ってもらうためにイベントを企画した。
- ② ただ概要を説明する形ではなく、実際に「クラフトスタジオ」を体験するイベントとした。企画内容としては、中高生が参加しやすいように「お菓子作り」とアイスブレイクをセットにしたものにした。アイ

- スブレイクをすることで企画参加者同士の交流を図るとともに、スタジオを中心とした簡単な施設紹介も参加者たちが行った。また、参加者たちが参加者にお菓子作りをレクチャーする必要があったため、準備会では作り方と材料を再確認し、司会進行等の役割分担も行った。
- ③ 当日は、ムサカツ参加者の知り合いを中心に、第一部には4名、第二部には2名の中高生が企画に参加をした。

アクション報告 | あそぶ・まなぶ

チーム②

Study Oasis

日時 2025年1月12日(日)
時間 10:00~12:00 北コミセンで行われたCチームのアクションに参加
13:00~14:00 プレイスB2フロアにて、プレイス利用者にアンケートへの協力をお願い
場所 午前…吉祥寺北コミセン/午後…武蔵野プレイスB2フロア

模造紙まとめ

Study Oasis	自習室足りてますか?
自分たちの問題意識(問い)と願い	自習室が無い・知らない → 自習室を増やす・知り、てもらう
アクションの目的と根拠	・ 自習室マップ作成←人を分散させる ・ アンケート←データが欲しい
アクション実現のために必要だった資源(人、場所、もの、予算、広報、etc)	・ 場所→北コミ、プレイス、学校 ・ 人→ 中高生、在住・在学の人 ・ 物→ アンケートのポスター、google form ・ 広報→ チラシの書き付け
目的に対してできたこと できなかったこと	① データをあつめられた ② 一人一人の希望を収集できた ③ 「自習室が必要か」を聞けていない ④ 自習していない人への理由を聞けていない
その理由	① … 学校に協力してもらった ② … 自由記述 ③、④ … 単純にわすれてた
同じような原(はら)いをもつ中高生世代へ一言	アンケートご協力 お願いします!

当日までのプロセス

- ① 議論する中で参加者から出てきた「自習する場所がない」「自習する場を増やして欲しい」という願いはムサカツに関わっていない同世代の中高生にとっても同じ願いなのか、そうした声を拾うためのアンケート調査を企画した。
- ② アンケートで聞く項目も自分たちで考え、準備会に集まった参加者でその内容を基にしたアンケートフォームの作成と、アンケートを行うことを周知するためのチラシ作りを行った。

- ③ アンケートについては、参加者たちが身の回りや学校で協力をお願いすることを想定していたが、その他にも吉祥寺北コミセンにチラシを置いてもらったり、武蔵野プレイスを利用している中高生に対してチラシを見せながら直接アンケートへの協力をお願いした。約3週間の実施期間で、578名分の回答を得ることができた。

アクション報告 | くらす・はたらく①

チーム①
ボードゲーム de あそぼ!!!
feat. 美しきイルミネーション!!!!!!

日時 2025年1月26日(日)
場所 グリーンパーク商店街

模造紙まとめ

ボードゲームdeあそぼ!!! feat. 美しきイルミネーション!!!!!!	
自分たちの問題意識と願い	商店街に来る人が少なく、来る人も限られている。 商店街をより活性化させて欲しい。
アクションの目的と概要	もと多くの子供達に来てもらうために、 キャンドルを中心とした装飾もライトスペースでボードゲームを実施して
アクションのために必要だった資源(人、場所、もの、予算、広報 etc...)	商店街の1室、キャンドル×100個、景品。(商店街の品物) ボードゲーム、チラシ、舟木さん(商店街の関係者)、 予算3500円。
目的に対してできたこと・できなかったこと	おおよそ13人、ことごとく26人に来てもらえた。加えて商店街の商品を知ってもらえた。 商店街周辺以外の人をつれてこれなかった。また多世代を呼びこめなかった。
その理由	時間が限られていて十分に告知することができなかった。 もと中高生向けの企画を行うことができなかった。
同じような願いを持つ中高生世代へ一言	広報は事前に余裕を持って始めて対象となる人 に届くような方法で传いましょう。

当日までのプロセス

- ① 商店街に自分たちの発想で賑わいを生み出すには? という問いを出発点に取り組みづくりが始まった。本体プログラムに追加で行った1回目の準備回においては「自分たちがやりたいことは何か」という議論が中心になった。企画細部を検討するには至らず、ここまでの議論をスタッフで整理、外部との調整も行いながら再度設定した2回目の準備回では、ここまでの議論内容と会場となる空間を確認し、具体的な実施スケジュールを組み立てながら、必要なものや当日の動きを確認した。
- ② 事前の広報が行き届かなかったこともあり、当日近隣で催されていたイベントや地域食堂でのチラシ配布を実施したほか、イルミネーションのためのキャンドルや室内レイアウト、ビンゴ大会の景品準備を行った。
- ③ 当日は、地域食堂を利用する小学生やその保護者の方を中心に、予想以上に多くの方と交流することができた(総勢39名、内訳:中学生以下26名、保護者13名)。

アクション報告 | くらす・はたらく①

チーム②
地域食堂お手伝い計画

日時 2025年1月12日(日)
時間 15:00~19:00
場所 グリーンパーク商店街・MIDOLINO_「ウUNCHク」の多い料理店」(地域食堂)

模造紙まとめ

地域食堂お手伝い計画!!	
アクションの目的と概要	① 地域食堂で手伝いをして、実状を知る。 ② アンケートを実施して、利用者の便向をつかき、思いを知り。
自分たちの問題意識と願い	老人と人のつながりという場として 商店街を活性化したい。 地域食堂が地域に根付いた商店街 を目指す。
アクション実現のために必要だった資源(人、場所、もの、予算、広報 etc...)	場所: MIDOLINO_ 地域食堂 ウUNCHクの多い店 人: 舟木さん、塚井さん、地域食堂のみなさん もの: アンケート、ボード、ボールペン、シール エプロン、三角巾
目的に対して、できたこと・できなかったこと	① アンケートの回収率が上がった。 ・ 普段商店街を利用しない理由が「家から遠い」「スーパーが近い」 ⇒ 家から遠くて来ない理由・目的の必要性 ・ 利用しているお店に偏りがある(つまりあるお店を知らない) ・ 知りさへが広がらなかったコミュニティ 広報が足りていない? ② 実働に一日働いて、コミュニティができてきていることを実感できた。 X インタビューができたため、運営者の声と聞けなかった。
その理由	・ 普段からのお客さんとの信頼関係があったから、回収率が上がった。 ・ 話を聞いたので直接話すタイミングがなかった。 ・ 利用者のたちの会話を耳にした。
同じような願いを持つ中高生世代へ一言	灯台下暗し! まずは自分の地域を知ろう

当日までのプロセス

- ① フィールドワークで伺った「地域食堂」は比較的時間き馴染みのある「子ども食堂」とのギャップがフックとなり、現場のお手伝いを通して食堂を通じて生まれる人のつながりなど実状を知ることが本グループのアクション実施に繋がった。他グループとは異なり、企画作りや集客などの必要が無かったため利用者向けアンケートの項目を考え、データは参加者が自宅で作成しオンライン上での共有を行う段取りを行った上で当日を迎えた。
- ② 当日は開店準備の清掃や看板等の設置、開店後は来店した方の案内や配膳を行いながら、利用者の方に対してのアンケート協力の声かけを行った。運営している方々とのコミュニケーションや食堂に集う方との交流には及ばない部分もあったが、アンケートにはほぼ全ての利用者の方に協力していただいた(子ども21名、大人28名)。

アクション報告 | くらす・はたらく②

チーム①

カジュアルムサカツ

日時 2025年1月26日(日)
時間 10:00~12:00
場所 吉祥寺北コミュニティセンター(2F多目的室)

模造紙まとめ

カジュアル ムサカツ	
問題意識と願い	夢や進路を決定するにあたり相談できる大人が少ない。 知識や考えなど、刺激がもたえられる場が欲しい!
アクションの目的と概要	目的 → 大学生や社会人と交流できる場を設ける。 概要 → 大学生や社会人とローテーションながらセッションを行う。
アクション実現のために必要だった資源(人、場所、もの、予算、広報 etc)	・社会人、大学生 ・フィールドワーク ・おかし、飲み物 ・準備回数増やす ・場所予約(場合によっては料金) 予算 ・広報(市報、ポスター、ツイッターなど) ・対象(学生、働き世代、若い世代に寄り添う人)
目的に対してできたこと	＜できたこと＞ ・目的達成 ・企画運営に必要な人材を集めた。 ・企画の進行 ＜できなかったこと＞ ・それぞれの温度感にあった交流が ・どうしたら楽しめるか考える時間が不十分 ・広報日不足だった。 ・ネットの明確化(参加前から参加後に分けるように)
理由	臨機応変に対応できた 日程調整が難しかった 長期的に行う場合継続しない 継続
同じような願いを持つ中高生世代へ一言	大事なことはコネクション(人とのつながり)。余裕をもった計画。 リサーチや、たくさん人と集めることです!!!

当日までのプロセス

- ① 自分の進路や将来について考える上で「社会人」および「大学生」と交流したいという企画。準備については、参加者自身がどのように「社会人」とつながり、来てもらうお願いをするかがポイントであった。今回は、参加者の一人が「ボランティアセンター 武蔵野」とつながりを持っていたことから、自ら直接コンタクトを取り、企画の趣旨を伝えて市内で地域活動にも携わっている社会人の方を2名(合原聡美さん、野口英樹さん)をご紹介いただいた。学生は本事業に関わる大学生のファシリテーターに声をかけて参加を依頼した。
- ② チームとしては事前にオンラインで準備会を開催した。質問内容の確認(活動内容、仕事に就くまでのプロセス、プライベート話など)、企画の構成(アイスブレイク、グループトーク、振り返り)、役割分担などを行った。
- ③ 当日は、他チームからも3名が参加をして、総勢10名で座談会を行った。

アクション報告 | くらす・はたらく②

チーム②

ハッピー?ラッキー!?クッキー!!!
~多世代交流しよう~

日時 2025年1月26日(日)
時間 14:00~17:00
場所 吉祥寺北コミュニティセンター(2F調理室・和室)

模造紙まとめ

ハッピー?ラッキー!?クッキー!!!	
自分たちの問題意識と問い	多世代と関わる機会が少ない。 (人見知りをおさ、自分の意見をはきりきかたに、見る視野を広げる)
アクションの目的と概要	クッキー作りを通して多世代交流をする。
アクション実現のために必要だった資源(人、場所、もの、予算、広報 etc)	・参加者・企画者 ・キッチン・ゲーム用の部屋 ・クッキーの材料・道具 ・2000~3000円 ・北コミセンのオープンチャット
目的に対してできたこと、できなかったこと	①他世代とは交流できたけれど、多世代交流はできなかった。 ②趣味や好きなことの話はできたけれど、生い立ちの話はできなかった。 (経験など)
その理由	①テーマが子育て世代の興味を引くものだった。 ②世代が若かった。 プログラムの中で、生い立ちなどの話をする時間をとれていなかった。
同じような願いを持つ中高生世代へ一言	イベントに積極的に参加しよう!!

当日までのプロセス

- ① 「いろんな世代の人とコミュニケーションを取りたい」「人見知りをなくしたい」などの願いをもとに、多世代と交流するイベントを企画した。会場の吉祥寺北コミュニティセンターで事前の準備会を行い、交流の中身について話し合った。お菓子作りが得意な参加者がいたこと、会場に調理室があることから、「アイシングクッキー作り」を行い、作業を通じて交流すること、完成後に食べながらおしゃべりすることを交流の内容と決定した。
- ② 企画への参加者を募るために、参加者が告知文を作成し、運営事務局から依頼して、吉祥寺北コミュニティセンターが運用するLINEオープンチャットにて告知を行った。また、参加者自身が知り合いに参加の呼びかけをした。
- ③ 当日は、北コミのオープンチャット経由で2組、ムサカツ参加者の知り合い1組の、合計3組8名の親子連れが参加した。

第5回

伝える vol.1
アクションの振り返りと提案作成

日時 2025年2月2日(日)
場所 武蔵野市役所 412会議室
参加者 21人

実施目的

提言を作る前提として、「Teensムサカツ」の実施目的を再確認し、「誰に」「何を」「なぜ」伝えるのか、伝えた上で何が変わっていくのかを共有し、イメージする最終の提案会に向けて、各グループで提案作りに取り組み、発表に必要な制作物を準備する

所感

アクションを踏まえた提案作りは難しいと判断し、提案を作成するためのグループを再構成したが、個々の願いによる再構成ではなく、アクションチームがそのまま結合するという経緯を辿ったため、提案の抽象度が増したり上手くイメージをつくることが出来ない参加者が出てきてしまったのは反省点として挙げられる。ただ、一定の人数が揃った上で議論をし、役割分担しながら提案を作成するプロセスによって個々が提案について考え、それが最終回の活発な意見交換に繋がったとも評価できる。

実施プログラム

1.グループセッション

アクションに関わることが出来なかった参加者との共有及び振り返りが出来ていないグループもあったためアクションそのものの振り返りも行った。

2.座学「そもそもムサカツの実施目的とは?」

第5回を通じて作成する提案を【誰に】【なぜ】伝えるのかということを共通認識としてもってもらうことを目的として担当所管課である児童青少年課の職員より、ムサカツの実施目的、まちづくりにおいて中高生世代の声を表明する意義について、子どもの権利条例にも触れながらミニ講義を行った。

3.グループワーク

提案を作成するにあたり、アクションに参加出来なかった参加者が複数名いたこと、提案に直接結びつけづらいアクションがあったことを考慮し、これまでの議論の流れから以下の3つのテーマ(願い)を抽出し、再度グループイングを行った。

- ・中高生世代が過ごせる場(自習する場)がほしい
- ・中高生世代が主体となって活動できる環境がほしい
- ・地域の様々な年代の人と出会ったり、一緒に地域づくりに参加する機会がほしい

上記のグループイングと提案会の枠組みを参加者に伝えたうえで、これまでの活動において個々が考えたことや新しい視点を土台に提案作成に取り組んだ。作成におけるポイントを予め指定し、提案の基本構成を以下の3点とした。

A. 願い「こんなまちになってほしい」 B. 背景「なぜその願いを持ったのか」 C. 具体案・要望「実現に向けたアイデア」

また、具体的制作物に関しては、

①発表用パワーポイント ②ポスターセッション用模造紙(詳細版・各グループごと)

以上2点の制作をワークに組み込んだ。パワーポイントについては基本的なひな型を予め準備しイメージをやすくする一方で、模造紙については各グループのグループファシリテーターと参加者が目指す提案に応じた作成とした。

第6回

伝える vol.2
市政提案会「こんな‘まち’になったらいいな」を伝えよう

日時 2025年2月11日(火・祝)
場所 武蔵野プレイス フォーラム
参加者 28人

実施プログラム

1 事前準備

午後の提案会に向けて、発表原稿作成やリハーサルなど各グループで最後の詰め作業に取り組んだ。

2 市政提案会「こんな‘まち’になったらいいな」を伝えよう

最提案会来場者

小美濃市長、真柳教育部長、武蔵野市役所関係各課(秘書広報課、産業振興課、市民活動推進課、子ども子育て支援課、児童青少年課、生涯学習スポーツ課)、フィールドワークやアクションでお世話になった地域の方々

タイムテーブル

- ・全体発表:全3グループ各5分程度のスライドによる全体発表
- ・ポスターセッション:全3グループが作成した模造紙を展示したブースを設置するとともに6組のアクション報告を掲示した。来場者は自由に各ブースを回りながら参加者と15分/グループを目安に意見交換を行った。
- ・市長、教育部長による講評:各グループの提案に対するフィードバック、意見交換での感想など

3 振り返り、まとめ

提案会来場者が退場の後、グループごとに提案会を終えての感想交流を行い、市長、教育部長などから寄せられた感想や意見をもとに提案を再検討し、提案の最終決定をもって全6回のまとめとした。

4 修了式

グループファシリテーターより1名ずつ修了証を手渡し、一言ずつ感想をまわす形で修了式を行った。



実施目的

各グループの「提言」を市長および関係者に伝える「提言」について市長・関係者からフィードバックをもらい、それを踏まえて、各グループの取り組みを締めくくる

所感

提案会は「ムサカツ参加者のもの」というコンセプトで、一部の運営(司会、開会挨拶)を参加者自身で行ってもらう形とした。前年度に引き続き「意見交換の時間が足りなかった」という感想が多く寄せられ、今後最終回をどのように締めくくるのかは引き続き課題とはなるものの、昨年度と比べ多くの参加者が関わる会をつくることができたのは一定の成果と言える。

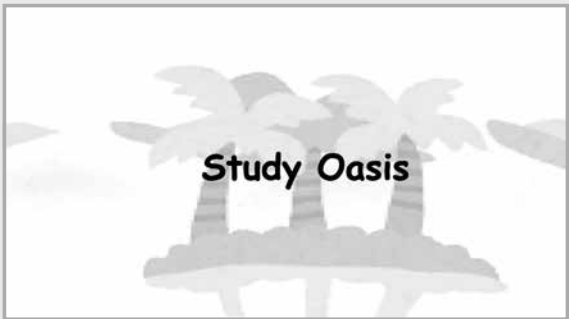


第3章 提言まとめ

第 1 部 | 全体発表

発表用スライド

市政提案の内容 ＊1



グループとしての願い

“勉学に励む人を応援する街” になったらいいな

願いの理由

- 私たちが「あそぶ・まなぶ」というテーマで活動する中で感じた願いは、勉強に励む人を応援する街づくりをしたい、ということだ。最初のフィールドワークで武蔵野プレイスをまわり、武蔵野プレイ斯を知るところから始めた。武蔵野プレイスには、スタジオや青少年スペース、自習スペースなどがあり、様々な活動ができるが、「あの自習室で本当に集中できているのか？」という疑問が生まれ、学生の声アンケートで集めることとした。
- このアンケートの結果から、自習室を増やすことを提案したい。

* アンケート結果については55-57ページに掲載

背景・メンバーたちの問題意識

十分に集中できる環境がないこと

- 家ではゲーム・テレビ等の誘惑があり、集中できない

休憩と勉学のメリハリをつけたいということ

- 家は休養の場に、自習室は勉強する場所にしたい

同じ目的を持つ仲間が欲しいということ

- 学校では周りで友達が遊んでいたり、家では家族がテレビを見ていたり勉強に集中しにくい
- 周りに勉強したいという同じ志をもつ人がいることで、勉強へのモチベーション向上に繋げることができる

具体的提案・要望

パーテーションの設置

- 自分一人で集中できる空間作りにする

教えてくれる人の募集

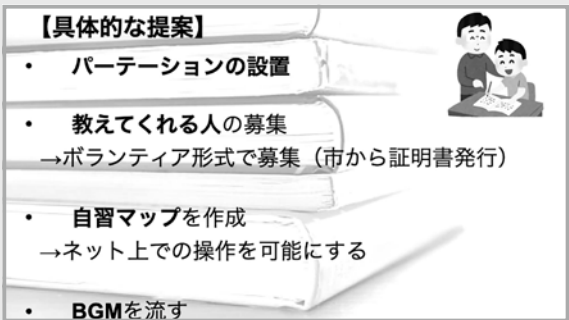
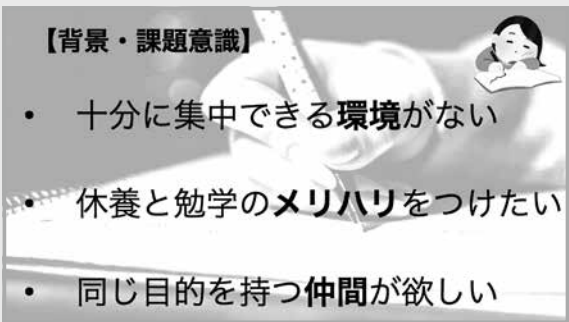
- わからないことをそのままにせず、理解までもっていくことでやる気やモチベーションに繋げる

自習マップの作成

- 武蔵野市にある自習室の数や場所を知らない人も多いため、まずは知ってもらう

BGMを流す

- ある程度雑音がある方が勉強が捗るという科学的もあり、実験的に実施による影響を検証したい



第 2 部 | ポスターセッション

市長・教育部長の講評

「勉強がしたい」、その一方で「休憩したい」、「休みたい」というワードもありました。これは何となく勉強していた我々の頃にはなかった感覚です。場所によってメリハリをつけることが今の皆さんの感覚だと考えると、家と勉強する場所は別々でもいいのかなと実感しました。ただ、「コミセンに自習室があるのを知っていますか」という質問をした際に「知らない」という答えがありました。現在、市内のコミセン全てに自習室があります。今後コミセンとよく話し合いをして、中高生の皆さんからこんな様々な要望があるということは伝えたいと思います。より皆さんが勉強しやすく、休むときはしっかり休むことができる、そんな空間作りをこれからしっかりやっていかなければいけないなと思いました。

——— 小美濃市長

勉強に励む人を応援するまちにしてほしいということでした。「自習室を増やしてほしい」という具体的な提案です。実は昨年12月の市議会でも実習室の一覧化や拡充について質問をいただいております。皆さんが勉強したいという気持ちは本当に大事なことですし、何とかしてあげたいと強く思いました。ただ一方で図書館を例に考えた際に、図書館で自習できるスペースと、本を閲覧するスペースがあります。自習室を多く確保すれば、その分本を閲覧するスペースが減ってしまいます。その辺りのバランスをどうしたらいいのかなというところや、図書館は何のためにあるのかというところにも立ち返って考えなければいけません。皆さんからいただいたご要望について持ち帰って考えさせていただきたいと思いました。気持ちは受け止めました。

——— 真柳教育部長

ポスターセッションの付箋より ＊2

- コミセンは勉強する場所のイメージがない。
- 混雑状況が分かるシステムがあったらいいな。
- 受験シーズンやテスト期間は、自習室が埋まって使えなくなる。
- BGMは自分でイヤホンとかで聞けばいいのでは？
- マップをインターネットに起こしてみたら？中高生でもできる！
- 勉強したいけど場所が足りていないという問題点を認識できた。しかし、それが「多くの」中高生の課題なのかは疑問。

*1 当時の発表原稿をもとに、運営事務局で説明を補った。

*2 来場者がコメント等を直接書いた付箋や意見交換における中高生の声をファシリテーターが記録した付箋から抜粋した。

来場者アンケートより

- 「静かなスペース」「少しにぎやかなスペース」など、中高生にはいろいろなニーズがあると聞いた。その日の気分によっても「居たい場所」が変わると思う。
- 自習室のあるコミセンが一覧化されているよりもマップに落とし込めた方が視覚的にわかりやすい。ファミレスなど中高生支援を打ち出している企業の情報もマップに記載したらどうか。
- マップについては、中高生の協力があればできそうだと思う。ただし、情報発信するためのツールについてはよく考える必要がある（ここは大人の力が必要）
- 自習室については、公共施設などの利用が「今日この時されていない」というタイミングで開放するなどの取り組みがあると嬉しい。
- 「勉強を教えてくれる人」については、市内の大学の教育学部や保育学科と連携し、学生を集めることができそう。
- 学習支援をしたい人が実践できる場を提供できます（地域食堂にて）。
- （教材について）問題集などは、現在寄贈している古本と同様に呼びかければ集まると思うので、コミセンの運営委員会で議題に出してみようと思う。

第1部 全体発表

発表用スライド

市政提案の内容 ＊1

未来をつくる プロジェクト

グループとしての願い

“中高生の思いを実現できる街” になったらいいな

願いの理由

今年度は、ムサカツで地域活性化などについてアクションを実施した。そこで若者たちが積極的にまちづくりの企画に関わっていくことで、継続的に街に人、特に若者を集める事ができるのではないかと考えた。

Teens ムサカツに参加する前は地域社会にあまり興味を持っておらず、人との関係性も希薄だったが、参加を通してチームで協力しながら案を出し合っていく中で地域貢献の大切さを学んだ。その結果、問題発見能力や解決能力を身につけることができ、これらの経験は、自分たちの成長にも繋がった。

このことから、私たちは、中高生の思いを実現できる街になれば、主に四つのことを達成できると考える

背景・メンバーたちの問題意識

ゼロから創造する好奇心を持てること

- 既存の枠組みにとらわれず、より豊かな発想を広げられるワクワク感があり、探究心を深めるきっかけとなる。

主体的な行動が取れるようになること

- 新しい企画を考えるためには、周囲を見渡し、課題を発見すること、自分たちなりの解決策を考えることが必要。

自己成長できること。

- 自分のやるべきことをやり、その結果に対して責任を持つこと、そして、他人から信頼を得ることを学ぶことが必要。

多様な人との交流が持てるようになること。

- 意見が対立することもあるが、双方の良い点を取り入れる工夫をすることで、新しい視点や考え方を知ることができる。

具体的提案・要望

きっかけが欲しい

- 学校を超えて何かやりたい中高生が集まる場所
- アイデアを一緒に考えてくれる場所

アイデアを気軽に届けられる仕組みを作って欲しい

- メンターコーディネーターの設置
- 今回の経験を通して中高生だけでは全てを実行することは厳しく、大人による介入やサポートの必要性を実感。

支援のサポートが欲しい

- 場所：市からイベント会場や情報提供のお願い
- 金銭：参加者から一定の料金を徴収する方向性
- 研修：人との接し方やコミュニケーションスキルに関する事
- 広報：市報、ポスター、SNSを活用してイベントを広める
- 支援：メンターの設置やムサカツのようなイベントの開催

中高生の思いを実現できる街になったらいいな



背景・課題意識

- 0から創造する好奇心
- 主体的な行動
- 自己成長
- 多様な人との交流

具体案・要望



きっかけが欲しい！
学校を超えて
中高生が集まる場所



アイデアを手軽に
届けられる仕組み
例) メンターの設置



アイデア実現
のサポート

第2部 ポスターセッション

市長・教育部長の講評

お話を伺っていると「何かみんなでやりたい」ということが伝わってきました。自分たちの自己実現、自己成長を促すことが最終目標かなと思っています。それはゼロから作り上げる好奇心を養うことや、主体的に自分たちが行動すること、多様な人たちと交流することによって自分を成長させたいということだということが伝わってきました。ムサカツもそうなのかもしれませんが、より広い意味での地域でのプラットフォーム、地域の中高生を中心にプラットフォームを作っていくことが皆さんの考える到達点なのかなと思いました。お金のかかる話ではないので市としてもできる限りのことは支援していきたいなと思っています。

——— 小美濃市長

地域活性化、中高生の思いを実現できるまちになったらいいなという提案でした。元々はグリーンパーク商店街などを見学して、具体的な提案をしたいと思ったと聞きました。こうして集まってアイデアを出すということは本当に大事なことだと思いますし、若者を集めるというキーワードもあったかと思います。この提案はもしかしたらこのTeens ムサカツでもできるのではないかなと思いました。そんな質問をブースを回ったときにさせていただきましたが、このTeens ムサカツだと、「まちづくり」というテーマがあるのでそうではなく、「ゼロベースで考えたい」という回答でした。それであれば、このTeens ムサカツを応用し、形を変えてということもできるのかなということを感じました。

——— 真柳教育部長

ポスターセッションの付箋より ＊2

- 自分たちで主催することによって自分の意見が言いやすい(通りやすい)
- 自分で企画したもので人が集まったり、子どもたちが楽しんでもくれるのが嬉しい。
- 市が定期的に場所を借りてイベントを開催して、「ミニムサカツ」のように、イベントを考える中高生を募集する。
- 中高生はきっかけがあれば参加するということは、市がきっかけを作る必要があるとわかりました。
- 中高生が集まれる「箱」があれば「中身」は後からでも。参加してもらえるならば実現可能性はある。

来場者アンケートより

- きっかけ(入り口)は「リアル」で、皆で企画力をアップしていく講座などからだに参加しやすいなどとても参考になりました。
- 「Teens ムサカツ」の枠組み、プラットフォームをどう継続するか。自走するには？
- 身近な商店街で、イベントや周知の企画を、中高生の皆さんから出してもらって、まちの人と一緒につくれるといいなと思った。
- 場所について、中学生がコミセンの部屋を借りることができないときいて、中学生でも借りられるようにするか、中学生限定の部屋を設けるかする必要性を感じた。
- 中高生の意見を活かすためには、窓口をわかりやすくすることが大切。
- 学校以外に、学校外の人たちと関われる機会を作るとは、特に現代では必要。「学校生活」がうまくいかなかったり、悩んだりした際に、「学校」以外にも所属する場、人とつながれる場があると、引きこもり予防にもつながるのではないかな。

＊1 当時の発表原稿をもとに、運営事務局で説明を補った。

＊2 来場者がコメント等を直接書いた付箋や意見交換における中高生の声をファシリテーターが記録した付箋から抜粋した。

第1部 | 全体発表

発表用スライド

市政提案の内容 ＊1



グループとしての願い

“人と人との近いまち”
になったらいいな

背景・メンバーたちの問題意識

- ・ 自身が住んでいる地域のご近所さんのことを全然知らない
- ・ 顔見知り程度で、深く関わりがない
- ・ 自分には新しい視点や視野を手に入れたい
- ・ 人との交流を通して思いがけない発見があるのが面白い
- ・ SNSなど仮想上ではなく、リアルでしか伝わらないものに触れたい

人と人との近いまち
—武蔵野市—



具体的提案・要望

既存のイベントに中高生が参加しやすい広報を作って欲しい！

- ・ SNS(X、Instagram等)や市報を活用した広報を行う
公式ながらゆるくギャップがあると興味を引くのでは？
- ・ 中高生が参加するにあたり見たいポイント
参加に費用は必要か？
開催される場所はどこか？
イベントはどんな雰囲気で行われているか？
参加する年齢層は？(同年代がいたら行きやすい)
友人と参加しても良いか？(仲良い友人となら行きやすい)

中高生も興味を持ちそうなイベントを作って欲しい！

現状

- ・ 幼児・親子・ファミリー、高齢者向けのイベントが多い
- ・ 中高生向けが少なく、参加しづらい
- ・ そもそもイベントがあっても知らない

イベント実施にあたって市に任せたいこと

- ・ 運営の基盤作成(資金、人材、参加者の募集、場所の確保)
- ・ 年代・性別・年齢問わず色々な世代の方々を誘う
- ・ 運営者及び企画案の募集をアンケートで実施してもらう
- ・ 運営側は若い人から高齢の方まで幅広い年齢層を人員にすることで参加者の世代間での孤立もなくなるのではないかと

実施したい企画例

- ・ スポーツ観戦 / ワードウルフ等のゲーム、編み物など / カラオケ大会 / ダンス / 自分の好きなものを語る会

第2部 | ポスターセッション

市長・教育部長の講評

このグループは具体的に、例えば、カラオケやダンス、編み物をしながら人と話したりなど、中高生向けのイベントを作ってほしいという提案でした。それに対して私は「市が作るイベントではなく、皆さんで作ってみたいと思うんですか」という‘逆’提案をさせていただきました。皆さん自身が作るイベントに多くの中高生の方々に参加をしてもらうことで、②グループの要望にあるような多様な人々との交流が生まれ、主体的な活動やゼロから想像する好奇心なども実現できるのではないかと思います。乳幼児や高齢者向けの市のイベントは数々あるけれど、中高生世代向けのイベントがないのではないかとという指摘もありました。なるほど、そうかもしれないと少し反省もしています。

——— 小美濃市長

人と人が近いまちというキーワードを出されていました。その背景は、SNSではなく、やはり「リアル」を求めたいということだと思います。手軽にスマホで見ることができるSNSですが、そこには限界があるということだと思います。SNSやインターネットとリアルとのバランスが大切なのだろうと思いました。具体的な提案としては中高生世代に向けたイベントをやってほしい、これが孤立も防ぐというお話でした。スポーツ観戦や編み物、カラオケ大会などが挙がっていましたが、このTeensムサカツもこれだけの中高生が学校を超えて集まってきているという意味で一つのイベントといえイベントです。ムサカツはまちづくりの提案ということで実施しておりますが、さらに何かみんなで楽しむことを目的とした集まりにしていこうというそんな応用形もできるのではないかとと思いました。

——— 真柳教育部長

ポスターセッションの付箋より ＊2

- ・ 今回は自分たちでアクションを企画したが、今後は参加する側が多くなると思う。
- ・ 将来のためにいろいろな仕事をしている大人に話をきいてみたい(市役所の人も)
- ・ 多世代交流で何を聞きたい？ -趣味の話、バックグラウンド、自分にもってないもの！
- ・ 地域で同じ趣味を持つ人を自力で集めるのは難しい。ふらっと行って、お菓子を食べてながら好きな趣味の話とかしたい。
- ・ コミセンの運営側に若い世代の人を置いてほしい。「こども委員会」みたいな仕組みがあってもいい。→コミセンに登録して提案してみるの？

来場者アンケートより

- ・ 広報についてはSNS(中高生版)は実現できそう。でも運営にも中高生が関わる仕組みづくりが必要だし、中高生の想いも大切！
- ・ 堅苦しくない、雰囲気などがわかる広報(参加者の孤立を防ぐ)→参加しやすくなる、というのは「なるほど」と思いました。
- ・ 幅広い世代の人を集めても、結局は同世代でかたまってしまうのでは、と思っていたが、「同じジャンルの話題でも世代によって知っていることが違う」という意見が印象的だった。
- ・ 今ある地域のイベントに、中高生が参加できる「関わりしろ」を増やしていくだけで成立をすると思います。
- ・ ワードウルフなどのゲームがあると話しやすい→場所や大人を集めるのは市、運営は中高生に任せてほしい、という気持ち心が強かったです。
- ・ 中高生向けのイベントは市として足りないところと思った。行政が入るとつまらなくなるので、中高生の皆さんで企画して、各コミュニティ協議会に提案し、実現することにより、自己の成長やコミュニティづくりにつながる。

＊1 当時の発表原稿をもとに、運営事務局で説明を補った。

＊2 来場者がコメント等を直接書いた付箋や意見交換における中高生の声をファシリテーターが記録した付箋から抜粋した。



第4章 事業の実施結果と振り返り

1. 今年度事業の実施結果

今年度は最終的に3つの提案グループが構成された。今後、中高生世代の声を市の施策づくり等へ反映していくために、本事業を通して中高生世代からどのような「声」があがったのか、提案会での意見交換や前年度から継続する話題などを運営事務局として補足して、以下に整理をした。

①「自習する場がほしい」

- 一つ目の提案グループは、「自習する場がほしい」という願いによって構成された。前年度も同様の声はあがっており、中高生世代にとって、自分とまちがつながる、身近で切実なテーマが「自習」に関する話題である。
- アンケート調査では、「静かに勉強したい」

と「勉強場所」を求める声がある一方で、「友達とおしゃべりしながら勉強したい」という「放課後過ごせる場」を求める声も上がっている。ワークショップ内でも「時間制限があると自由に過ごせず居場所感がない」「自分にとっては、勉強する場所と“居場所”は別だと感じている」などの「居場所」に関する議論にもつながっていたことから、このグループの提案は、広く「中高生世代の居場所」の課題として捉える必要もあるだろう。

- 市政提案会では「コミュニティセンターの自習室を知っていますか？」という質問が来場者から中高生に向けて複数あがった。実際に、自習に関するアンケートを市内各所に依頼する際に、参加者が吉祥寺北コミュニティセンターを訪れ、自習室を（ロビースペースで勉強する学生の姿も）見る機会があり、「コミセンに自習室があるのは知らなかった」「穴場かも知れない」という声があがっていた。「自習マップを作る」という提案のように、まずは既存の資

源について、中高生世代のニーズに合わせた形で伝えていく取り組みも求められている。

②「中高生主体で活動をつくりたい」

- 提案グループの二つ目は、アクションを通して自分たちで活動をつくるおもしろさや大変さ、課題を感じた参加者たちが、今後自分たちのように中高生主体で活動をする同世代をイメージした際に、どのような資源やサポートが必要かを話し合って提案した。
- 前年度も同様の声があがったが、提案内容としては資金面や相談窓口の必要性等が中心であった。今年度は、その前提として、中高生主体で何かをやってみようと思うきっかけや場の必要性が語られた（具体的な「やりたいこと」については、「進路や将来について大人と話したい」「趣味等を通して同世代・多世代とつながりたい」など前年度から共通するものが多かった）。
- 市長および教育部長の講評では、「中高生中心の地域のプラットフォーム」「ムサカツの応用」という表現もなされたが、その具体的なあり方については今後の検討が必要だろう。ただ、今年度事業がそうであったように、必ずしも初めから「やりたいこと」がはっきり意識化されているわけではなく、同世代が集まりおしゃべりをする中で、次第に自分の願いやニーズに気づいたり、お互いの関係性が築かれていく中で「じゃあこの参加者で何かやってみるか」というエネルギーが高まっていく場合も多い。そのため、本事業のような非日常の取り組みだけでなく、日常的に中高生世代が集まる居場所等も含めて、まずは中高生世代が集まり、思っていることをしゃべりあえるような「足場」をつくっていくことが必要になるだろう。

③「地域とのつながりがほしい・地域の活動に参加したい」

- 三つ目の提案グループは、中高生世代と「まち」

への関わりについて、「中高生主体でやってみる」というよりも、まずは「地域の情報を得ること」「既存のイベント等に参加してみること」をイメージしたときに、何が参加のハードルになっているかを話し合った。

- 来場者からは「広報について、SNS（中高生版）は実現できそう。でも運営にも中高生が関わる仕組みづくりが必要だし、中高生の想いも大切！」「中高生向けのイベントは市として足りないところと思った。行政が入るとつまらなくなるので、中高生の皆さんで企画して、各コミュニティ協議会に提案し、実現することにより、自己の成長やコミュニティづくりにつながると考えた。」など、中高生世代と行政、地域コミュニティが協同して解決策を探るような方向性のコメントが多くあがった。
- ポスターセッションで話題にあがったのは、コミュニティセンターへの中高生世代の参加についてである。意見交換では、中高生世代が行きやすくするために、「コミセンの運営側に若い世代の人を置いてほしい」という声に対して、来場者から「コミセンに登録して提案してみるのは？」という応答もあった。これまで接点なかった中高生世代がすぐに運営に関わることはハードルがあるだろうが、参加者の中には「小学生の頃はよく行ってた（けど、中学生になってから行かなくなった）」「もっとコミセンの魅力をいろんな人に知ってほしい！」と語る参加者もいた。今後に向けては、小さい頃にコミセンで「育った」子どもたちが、中高生世代になったときに、イベント等のお手伝いや運営側に立ち位置を変えて関わられるような工夫もアイデアとしてあがっていた。

2. 参加者にとっての「Teens ムサカツ」事業

参加した中高生世代にとって今年度のTeens ムサカツがどのような体験になったのか、最終回に書いてもらった「Teens ムサカツ振り返り」

レポート」から一部コメントを抜粋する。報告書等へのコメントの記載を承諾した参加者のレポートの一部を抜粋し、運営事務局で項目立てをして、以下のように整理した。

＜学校外の同世代と出会うこと＞

■ ムサカツに参加したことによって、違う学校だし、喋ったこともない仲間達と仲良くなれたし年齢が違うからこそ、もりあがれた気がする。ムサカツはもっとまじめだったりもっと皆がガリガリやってるイメージがあったけど、皆とわきあいあいでお菓子食べたり話したりできた。

■ 今回は、同じチームの仲間とは仲良くなれたけれど、他のチームとは交流は少なかったから他チームのメンバーとももっと交流したいと思った。

＜自分の思いを言葉にすること、話しあうこと＞

■ 今まで苦手だった人前での発表だったり、グループの中で自分の意見をいうことができた。

■ 去年の参加では自分の考えをみんなに共有しきれなかったことが心残りだったので、今年は少しでも役に立てるように色々と言見を出せたのではないかと思います。

■ 私がムサカツに参加した目的は主に、コミュニケーション能力の向上である。親にすすめられたため、初めはあまり乗り気ではなかったが、皆と言見を交わしていくうちに、この企画に対して能動的になっていった。思っていたよりも皆話しやすく、ファシリテーターの方も同年代と同様に話すことができた。

■ こうして一人一人が真剣に議題に向き合い、討論する時間は学校のグループワークとはまた違う新しい刺激となった。

＜地域の「人」「場所」に出会うこと＞

■ 『地域食堂お手伝い計画』では実際にはたらいでお客さんと接することができてとても学びになった。お客さんの話を聞いてみて、まず食堂への満足度の高さに衝撃を受けた。こんなにも人と人があたたかくつながれる場所があり、それをこのグリーンパーク商店街で終わらせてしまうのはもったいないと強く思った。

■ 本来、ムサカツにはあまり期待をしていなかったのですが、実際に参加して行った活動としてはとても自分のためになったと思います。ex) 商店街などについては考え方が180度変わりました。

■ ムサカツに参加して一番楽しかったのはやはりアクションです。皆でわいわい小学生達とボードゲームやったり寒いけど縄とびしたり本当に楽しかった。

■ (アクションでは)社会福祉に関わる人を呼ぶことができたが、その時のプロセスも勉強になった。

■ 参加する前は正直、地域社会についてあまり興味を持っておらず、コミュニティセンターの存在も知らない状態でした。しかし、参加してみると、やっていく中で現代の同年代の居場所が少ないことや、コミュニティセンターで色々な事ができることを知ったり、自分の意見したことを行動に移して、実現させることができるのだと知り、とても視野を広げることができました。

■ 実際に活動できたアクションが心に残った。なぜならば自分の計画性と実行力を知ることができたから。しかし、時間がたらず、思うように人を集められなかったのは心残りだった。

■ 実際に地域の人を呼んでアクションを行ったときには、参加者の方にもたくさん手助けし

てもらって武蔵野市民の温かさを感じられた。

＜市政に中高生世代の声を伝えること＞

■ 日常で関わる大人が教師の方々と親に限られている私たちでも市長と一対一で話すことができるのだと知れて嬉しかったです。

■ 意見をまとめるのは難しいと感じた。全く正反対の意見があるときはどうするのが良いのかと思った。より多くの意見を使えばいいのか、少ない意見もくみ入れるのか、くみ入れるとしてもどうするのがいいのかが難しかった。

■ 提案会で様々な方々にご意見いただき、その中で「これからやってみたいイベントを中高生で開催する」というアイデアをいただいたので、高校生になって時間ができたら自分が運営側に回ってみるのもありだなと思いました。

■ 高校生の意見には夢が、大人の意見には現実味があり、様々な意見をもらい、自分自身の成長になったと思います。「伝える、意見を言う」という面では十分達成できたと思います。しかし、この発表やプレゼンテーションが目的化せず、あくまでも街の人からの声を実現するための「手段」になると良いなと思います。

3. 今年度事業の振り返りと今後に向けた検討事項

最終回に「総まとめ振り返りアンケート」(以下、「アンケート」)を無記名で実施した。最終回欠席者にはオンラインフォームで回答を依頼し、32名の全参加者のうち27名が回答した。「全6回の満足度」(n=27)については、「満足」が67%(18名)、「どちらかといえば満足」が33%(9名)であった。事業を実施する上で重視したポイント(第1章参照)をもとに、事業の振り返りを以下の4点に整理した。

①「武蔵野市子どもの権利条例」を踏まえて、中高生世代の具体的な願いや要求を明らかにしていくこと

今年度は、実施期間を前年度の7ヶ月間(8月～3月)から3ヶ月間(11月～2月)に短縮して、参加者がより継続して参加しやすいような工夫を行った。ただし、各回の間が2週間しか空いていないため、前年度のように参加者の声を踏まえてフィールドワーク先等を選定することは困難であることから、小テーマ(居場所/商店街/地域活動の3つ)及びフィールドワーク先については事業開始前に運営事務局で決定して、参加者には興味のあるものを選んでもらう形とした。

アンケートの「印象に残っているプログラムを教えてください」の質問項目では(n=27、複数回答可)、「アクション」が67%(18名)、次いで「提案作成」30%(8名)であった。選択理由としては「実際に地域食堂に行き手伝いをし、お客さんの思いを知ることができたのはとても印象に残っているから」「知らない同世代の人にアンケートをしてもらえるように交渉をしたことが難しかったが、楽しかった」などがあがっている。前掲の「振り返りシート」の声も踏まえると、参加者にとっては、①企画の参加者や協力者など「人」に出会えた、②商店街や地域食堂、コミュニティセンターなどへの見方が変わった、③自分たちでやってみるおもしろさや課題に気づいた、などの体験につながったと考えられる。参加者の属性として「市内在学」の割合が多かった今年度は(前年度は約30%、今年度は約50%)、学校に通う以外は、まちとの接点がほとんどない参加者も多い中で、「まち」に対する気持ちや考え方に変化が見られたことは一つの成果である。

一方で、アクションから市政提案を作るプロセスには課題が残った。特に、商店街やコミュニティセンターに対する具体的な願いや課題点はいくつか出てきたが(詳細は、第6章参考資料の「提案に載らなかった声」参照)、それを「市政」提案につなげていくには、市が行っている役割や施策についての理解が必要になってくる。提

案づくりの時間が限られていることや中学生年代の参加者もいることから(実際、大学生年代のファシリテーターにとってもそのプロセスは容易ではない)、その点については難しさがあった。また、提案づくりを行うにあたっては、アクションチームを再構成する形で3つの提案グループに編成したが、それまでに話し合ってきたこととのつながりが分かりづらくなったり、アクションを通してグループの結束力が高まったことにより新たなグループで互いの関係性を再構築するのに難しさを感じたりする参加者もあり、自分の想いを提案に十分に反映しづらかったという面があったと考えられる。

一方で、「居場所」の小テーマからは、「自習する場がほしい」という中高生世代にとって切実な願いが立ち上がってきた。今日・明日の自分の生活に直接関わる課題であり、同世代のニーズを調べるために行ったアンケート調査についても、参加者が自身の在籍する学校のクラス等で呼びかけを行い約3週間で578件もの回答が得られた。テーマ設定の方法はいくつか考えられるが、話し合いやフィールドワークを通して、参加者にとって切実な願いが意識化されていくこと、テーマが深まり「自分ごと」になっていくことで、提言活動への熱量や関わり方が大きく変わっていくことを実感した。

②安心・安全な話し合いの場をつくること

前年度の課題であった「各回の継続的な参加」について、今年度は平均して約8割の参加率であった(前年度は約6割)。背景の一つには、前述の実施期間の短縮もあるかもしれない。運営側としては、月一回程度の頻度で半年間実施する方が準備時間は十分に確保できるが、中高生世代の時間感覚としては、一ヶ月空くと忙しい学校の日々の中で、本事業への意識が一度途切れてしまうということもあると思われる。その点では、連絡手段としてLINEオープンチャットを活用したことで、参加者の本事業への意識や関

わりを保つことができたのかもしれない。また、内容面では「アクション」という大きな取り組みがあったことから、その実現に向けてチーム内での関係性が深まり、継続参加の要因になったとも考えられる。

アンケートの「安心してワークや議論に参加できましたか」の質問項目では(n=27)、「安心して参加できた」が70%(19名)、「普通」が30%(8名)、「安心感を持つことができなかった」の回答はなかった。また、「グループファシリテーターの存在は議論やワークの助けになりましたか」の質問項目については、「とてもあてはまる」および「あてはまる」が82%(22名)であり、回答理由としては、「皆の話し合いが止まってしまったときに話題提起などをして助けてくれたから」「グループワークを先導すると反感を買うのではと思い遠慮していたので、そのような役割の人がいて助かった。」などがあがった。前年度同様、グループファシリテーターの存在は非常に大きく、参加者一人一人と関係性を築きながら、安心して話しあいに参加できるような環境づくりができたといえるだろう。

③「自分たちの声によって、状況が変わるかもしれない」という体験を通して自己効力感を高めること

まず、前年度同様に、最終回到市政提案会を開催して、「提言」を一方向的に伝えるだけでなく、市長をはじめ市関係者、地域の方と十分に意見交換ができるようにポスターセッションの時間を設けた。アンケートの「自分自身の市政やまちづくりに関する意識の変化について」の質問項目では(n=27、複数回答可)、「参加前より身近に感じられるようになった」が70%(19名)、「自らの意見を伝えること、行動してみることにプラスの可能性を感じた」が44%(12名)、「特に変化はない」が14%(4名)、「関わることは難しい／面倒だと感じた」が4%(1名)であった。選択理由としては「実際に市政に意見を伝えてみて、けっこう真剣に受け取ってくれた大人が

多かったから」などがあがり、前掲の振り返りレポートの記述とあわせると、市政提案会での意見交換を通して「自分の声が受け止められた」という実感は持つことができたのではないだろうか。

一方で、前年度のアンケート回答と比較すると、「自らの意見を伝えること、行動してみることにプラスの可能性を感じた」と答えた割合は下がっており、「意見を伝えることでどうなるのか」という本事業の意義や可能性を参加者に示していく部分では課題が残った。

今年度は、前年度の提案内容について市からフィードバックを行う「ムサカツ同窓会」を8月に実施した(対象は前年度の修了生)。参加者からは、「自分たちが出した提案に市から回答が得られたのでよかった。あいまいなところもあったが、私たちの考えにしっかり向き合ってくれたのではないかと思った」という肯定的な受けとめもあった一方で、「検討をたくさんしていただけるのが分かってよかった。しかし、(制度や施策の)見直しのタイミングが遠くて…(中略)…自分が〇〇をしてほしいと提案しても、それが実現する頃には自分が対象ではなくなってしまうかもしれないということ、今じゃないかもしれないということだと声をあげにくくなってしまった人や、めんどくさくなってしまった人もいるのかなと思った」という指摘もあがった。

本事業で集められた中高生世代の声を市の施策等に反映させていくには一定の検討プロセスと時間が必要であるが、中高生世代の参加者たちが「当事者」でいる時間は限られることを踏まえると、最終的な提案の内容だけでなく、提案の背景にある願いや課題意識を踏まえて、どのようなことであれば考えられるのかを大人の側で具体的に検討していくことは必要だろう。

今年度は、「中高生世代に伝わる広報」に関する提案を踏まえて、提案会終了後に本事業の様子を市公式Instagramに投稿する際、担当課の職員がムサカツ参加者のLINEオープンチャットで「中高生世代に伝わる投稿文」を中高生に募集した。また、武蔵野プレイスにおいては、今回あがった自習ニーズも踏まえて、施設内の空き

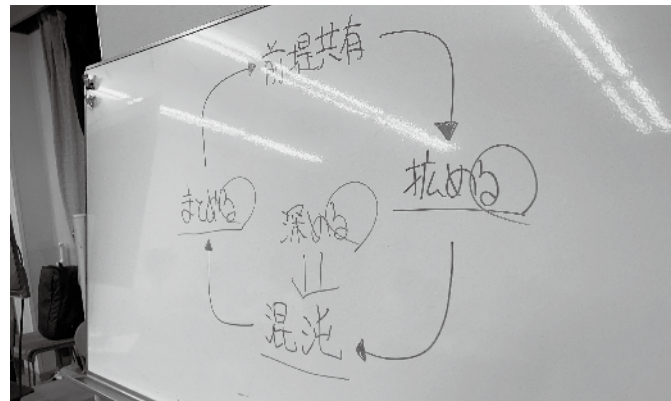
部屋を開放するような取り組みも実施される予定である。このような「目に見える小さな変化」が積み重なっていくことで、自分たちが声をあげること、「意見表明」を行なっていくことの影響力や意義を具体的に感じることにつながるのではないだろうか。

④「声を聴かれにくい子ども・若者」の声を集める工夫を設けること

アクションの一環として中高生たちが実施した「自習に関するアンケート」は、「参加している自分たち以外の同世代は、自習についてどんなニーズを持っているのか」という声がきっかけとなり実現した。必ずしも、不登校や生活困窮など多様な背景の中で生きる同世代をイメージしていたわけではないかもしれないが、「事業に参加していない同世代のニーズも踏まえて提案する」という動きは今後の本事業の可能性を示している。本事業への参加の「裾野」を広げる工夫は引き続き行いながら、市内の中高生世代を対象とした事業等(若者サポート事業など)と情報交換をしていくことも引き続き必要になるだろう。



第5章 人材育成



ファシリテーターの研修体制について

第1章の「運営体制」に記載の通り、本事業の実施にあたりグループファシリテーターとして実施団体職員2名を含む計11名配置した。参加者と年齢の近いスタッフが話し合いのサポート役を担うことで、参加者との関係づくりや意見を言いやすい雰囲気をつくることを期待したため、ファシリテーション経験の有無を問わず、概ね30歳以下の方を募集した。

上記の通り、ファシリテーション経験の有無を問わない募集形態であったため大半の大学生にファシリテーションの経験が無い状態であった。子ども主体、あくまで参加者の意見表明を尊重することに重きを置く事業の性格を踏まえ、事業実施前に以下の研修をグループファシリテーター向けに実施した。

Teens ムサカツファシリテーター研修 「こどもの声を聴く～こども聴診器養成講座～」

日時 2024年10月5日(土) 講師 山本 晃史 さん (株式会社C&Yパートナーズ)

実施目的

- ・現在の社会情勢を踏まえて、子ども・若者の意見表明や社会参画の意義について知る
- ・ユース(子ども・若者)の伴走者(ファシリテーター)としてのマインドとスキルを学ぶ
- ・こども一人ひとりの声を尊重し、テーブルファシリテーターとなってこども意見聴取の場を運営することができる

実施内容

座学

- ・「子どもの権利について学ぶ」
- ・「なぜ、子ども・若者の参画が必要なのか？」
- ・「伴走者(ファシリテーター)としてのマインドとスキルを学ぶ」ワーク

実習ワーク

- ・「ファシリテーターを担う上で問いかけのコツやポイントを実践してみる」
- ・「実際のテーマに沿った議論において、それぞれが役割を担いながら大切な視点を学び、振り返りを行う」

その他、

- ・複数配置によるフォロー体制づくり
- ・団体職員をメンターとして、必要に応じてアドバイス、サポートの実施
- ・段階的な役割の拡充による負担軽減

によって、グループファシリテーター自身の参加に無理がないように適宜調整を行った。また、実施団体の基本方針として事前ミーティング及び事後の振り返りを大切な研修の機会と捉えており、事前ミーティングにおける各回の目的やワーク内容の理解と疑問点の整理による主体的な参加を促すとともに、事後の振り返りにおいては、「安心・安全な話し合いの場」をつくることを一義としながら、子どもたちとどのような関わりが必要か、ファシリテーターとして大切な視点の検討・共有を行った。

グループファシリテーター 振り返り

昨年度との違いの観点から今年度のムサカツについて振り返ると、各中高生が持つ願いをもとに彼／彼女らができるアクションを実施したことが昨年度と異なる点であった。昨年度は中高生の持つ願いをもとに政策提言を作成していったが、今年度は願いをもとにして中高生が今できることを実施し、実施したアクションを参考にしつつ政策提言の作成を進めた。アクションの実施にあたってはその準備が重要でありながら、私にとっても中高生にとっても困難なものであった。しかし、アクションやその準備を行うことで中高生が持つ想いをより具体的に感じることができた。中高生自身もアクションを行うことで自分達にできることや、中高生だけではできないことが明らかになり、政策提言に向けた1つの取り組みとして実施してよかったと感じた。アクションは準備も含め、中高生たち同士の仲を深めたり、私たちファシリテーターと中高生同士も仲を深めることができたりと政策提言には直接は関係ないが、しかしムサカ

ツを行っていくうえでは印象に残る部分であった。また、中高生と一緒に「こんなまちになったらいいな」というテーマについて考えることができたことはいい経験になった。日常生活の中で中高生と関わる機会自体も多くはないが、それ以上に中高生が自分たちの暮らすまちについて感じていることについて話し合うことができる機会は減多にない。私自身高校を卒業してから6年ほどになるため、今の時代の中高生が生活の中で何に満足し、何に満足していないかを会話をする中で知ることができた。ムサカツに携わったからこそ得ることのできた視点があった。

(一橋大学大学院)

市政提案会におけるプレゼン・ポスター作りが、子どもたちにとっても私にとっても最も難しかったワークだと思う。「普段関わらない年代・立場の人と関わりたい」という願いのもと集まったグループメンバーで、子どもたちの中でアクションから得られた学びの内容や「人と関わりたい」という言葉の真意が違うことが話し合いにおいて障害になっていた。その話し合いの時間の中で、プレイヤーでなくファシリテーターとしてできる発言とは何か、という問いが私個人としての課題として浮かび上がった。私が気付いたことや私が思いついたことを口に出すのは簡単だが、あくまでムサカツにおけるプレイヤーは中高生である。活動当時は、誘導するための言葉が出てこず、子どもたちの言葉として引き出したいワードしか浮かんでこないことが悔しかった。しかし後から、私は私が導き出した言葉を何とかして中高生に言わせようとしていたから難しかったのでは、と思い至った。子どもたちにとって目指したいゴールと、私が思い描いたそれとは違うかもしれない。ファシリテーターにできるのは、わだかまりや滞りのものが何かを先回りしてみつけて、その箇所をわかりやすくすることなのではないか。この気づきを踏まえて、自分が今できる声かけは何か、今度臨機応変に対応できるようになりたいと思う。

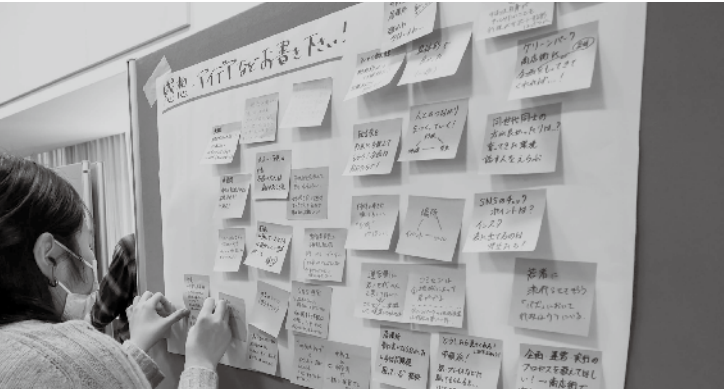
そして市政提案会での中高生と市の職員や地域の人との意見交換に参加して、大切なのはひとりひとりが当事者意識を持つことなのだと改めて感じた。ポスターセッションの時の中高生はみんなとてもいきいきとしていて、それはきっと傾聴してくれる大人の存在が目の前にあることが実感できたからなのだろうと思った。自分たちの力で何かを変えられるという環境が、市としての活性化につながる。ムサカツの活動自体も中高生に市民としての実感や意識の種を送るとても大事な一歩なのだと考えた。

(成蹊大学)

ムサカツの中で、ファシリテーターとして、難しさを感じる部分は多くあった。「大人と話したい」という意見から生まれた、クッキー作りのアクションだが、実際は小さい子どもたちの参加が多く、想像と違うものになってしまった。企画の段階で、もう少し対象者を考えて構想するべきだったなと感じた。その他にも、参加者が少ない回があることから、活動を進めにくかったり、議論の中で、子どもたちの本当の意見が聞き出せなかったりしたことがあった。また、「どんな街にしたい？」と聞いても、中々答えが出にくく、出た答えであったとしても、本当に中高生はこれを望んでいるのだろうか、疑問が残ることもあった。しかし、同じファシリテーターの人たちと話し合いを重ねて進行することで乗り越えられたと思っている。参加者一人ひとりの性格や特性を考えながら、議論の進め方を考えるのは難しかったが、その自分分の成長に繋がり、良い経験になった。また、ムサカツを通じて、中高生がアイデアを出して、提案やアクションなどを一から作る手伝いができ、自分自身も非常にやりがいを感じられた。

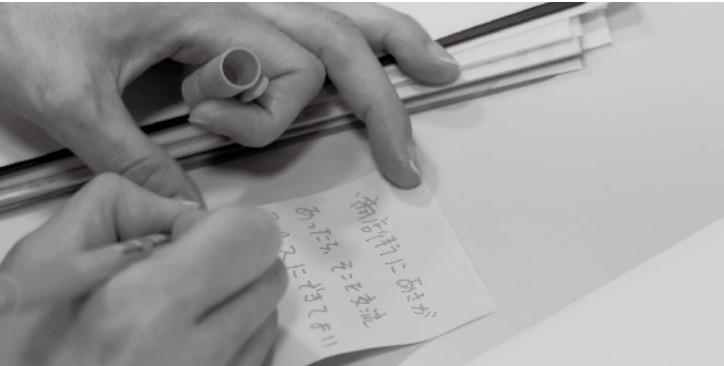
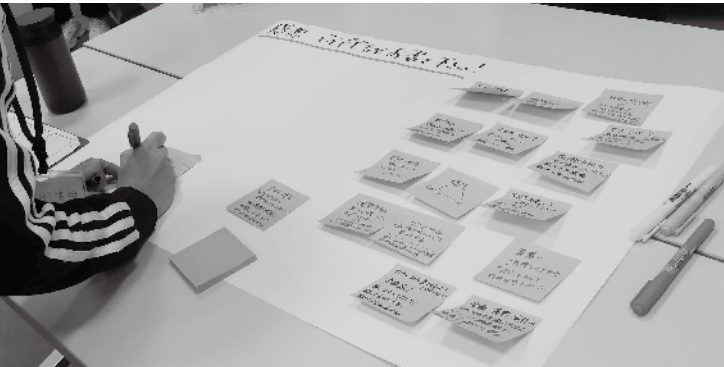
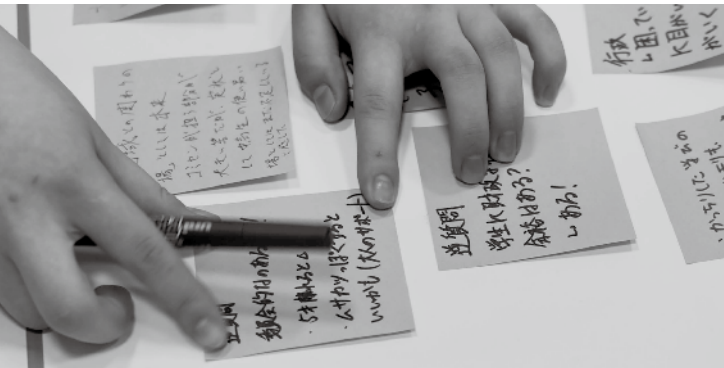
運営側への要望としては、中々難しいことは承知だが、1日の活動時間が長いと、参加者の集中力が途中で途切れているように感じたため、できる範囲で時間を短縮できれば良いと思った。また、武蔵野市がどんな取り組みをしているのか、どこまで自分達に寄り添って行動してくれるのかの想像がつきにくいと、その説明があれば、より議論が進みそうだなと感じた。

(早稲田大学)



第 6 章 参考資料

市政提案会ポスターセッションの記録
市政提案会来場者アンケート
事業評価アンケート
自習についてのアンケート



提案会ポスターセッションのふせん記録

項目	ふせんの内容	
既存の資源	・コミセンを利用 ・コミセンは勉強する場所のイメージがない。 ・市役所および市の施設はハードルが高い。もっと情報開示して使いやすさをUPすべき。 ・公共施設を期間限定で開放したらどうか	
自習マップ	・マップをインターネットに起こしてみたら？中学生でもできる！ ・ウェブの自習室マップを作成	
具体的な提案について	・大学生がボランティアで自習の見守りをして、その対価として証明書みたいなのを与えるというのがいい発想だった。 ・教えてくれる人、話を聞いてくれる人がいるといい ・大学生がいること自体は良いことだけど、すぐに答えを出したら思考力が育まれるのか？それは果たして「学習」なのか？ ・BGMは自分でイヤホンとかで聞けばいいのでは？ ・騒音スペースと静かスペースをわける。 ・パソコン貸し出し式 ・wi-fi必要 ・お金を払って自習室を借りるメリット:お金を払ったからにはやらなきゃ！という責任感に追われる。 ・勉強したいけど場所が足りていないという問題点を認識できた。しかしそれが「多くの」中高生の課題なのかは疑問。 ・今回のプレゼンが目的化しないために、大人を仲介せず何かアクションを起こすべき！ ・体験してこそ物事を知れる。(ムサカツのように)実際にやってみるイベントを増やせるといい。	
背景・アイデア	・家で集中ができず、気が散らない環境がほしい。 ・自習マップをつくる。一覧で見れるものをつくる。 ・時間制限があると自由に過ごせず、居場所感がない。 ・混雑状況が分かるシステムがあったらいいな。 ・うるさいのは×だけどある程度雑音がほしい ・受験シーズンやテスト期間に入ると自習室が埋まって使えなくなる。 ・「自習する場」では静かにやりたい。「居場所」とは違う？公園とか？	

提案会来場者アンケート

- ・学習支援をしたい人が実践できる場を提供できます(地域食堂にて)
- ・伴走方法・成果が出るまでの仕組みは課題
- ・自習室のあるコミセンが一覧化されているよりもマップに落とし込めた方が視覚的にわかりやすい。
- ・中高生はメリハリをつけて勉強したいので、食事はファミレスで、集中して勉強するのはコミセンや図書館で、と使い分けられるのが良い。
- ・市内の大学の教育学部や保育学科と連携し、学生を集めることができそう。
- ・「教える」よりも常駐くらいの方が中高生も声をかけやすい。
- ・「友達とも席離れた集中できる環境を」「(既存の)有料の自習室でも、100円／2時間くらいの中高生料金あれば良い」というのも当事者目線で参考になりました。自習マップ(設備や会員登録の要否など)をまとめると使いやすいというのは大人にも◎
- ・まずマップについては、中高生の協力があればできそうだと思う。ただし、情報発信するためのツールについてはよく考える必要がある(ここは大人の力が必要)。
- ・大学生の活用については、教職を目指す人の活用などが具体性があった。
- ・自習室については、公共施設などの利用が「今日この時されていない」というタイミングで開放するなどの取り組みがあるとおもしろい。
- ・自習室ごとのリアルタイムの空き状況をSNSで発信。自習室ごとで教えてくれる方を配置して、自習時間と質問タイムを分けることで人を分散する。
- ・まずはコミセンの担当として、コミセンを知ってもらうということからも、自習マップの作成は効果的と考えた。
- ・自習室の様々なニーズを聞いて非常に参考になった。教えてくれる人の募集などは市内の大学生ボランティアなどならすぐに集まるのではないかと感じた。問題集も現在寄贈している古本と同様に呼びかければ集まると思うので、コミセンの運営委員会で議題に出してみようと思う。
- ・学びたい、効率的に自分の時間を作りたい、ということを実現することが、学びの主体性を育むことにつながると思います。空きスペースの活用、自習室マップなどで自習する場を増やせると思います。
- ・テーマが具体的で、すぐさま活かせるような提案が多かった。
- ・勉強を教えてくれる人を募集するのは、世代間の交流につながる。
- ・そもそも自習できる場所があるかどうか分からない人がほとんどだと思います。私もカフェや図書館くらいしか知りません。自習マップがあったら嬉しい人は多いと思います。
- ・自習室について調べ、アンケートをとるなど情報を集めた上で自分たちがどのようにしたいか考えて良いと思いました。自習室だけでなく、居場所は不足していると思います。特に吉祥寺周辺にはないので増やせたらいいと思います。
- ・「自習室を増やす」ということは、以前からも必要とされていることだが、単に「場」を増やすことだけでなく、人や備品の充実も必要だと感じました。
- ・中高生には、いろいろなニーズがあると聞いた。その日の気分によっても「居たい場所」が変わると思う。いろいろな自習室、スペースがあるといいのかな、増やせるといいです。

提案会ポスターセッションのふせん記録

項目	ふせんの内容	
思いを形にする きっかけ・場	・中高生はきっかけがあれば参加するということは、市がきっかけを作らないといけないとわかりました。 ・今あるイベントに中高生の枠ができるといいのか？たとえばお祭りとか。 ・中高生が集まれる「箱」があれば「中身」はあとからでも。参加してもらえるならば実現可能性はある。 ・「ムサカツ」のような枠組みを継	
大人（協力者）について	・どうやって大人とつながるのか？ ・大人の中でもどの世代？	
必要な資源について	・企画を行う場所代や研修などは、工夫すれば費用をかけずにできそう。 ・コミセンを知って活用して！コ	・続してほしいということかと理解しました。 ・中高生の強みは？ ・「アイデア」は誰が考える？自分たちで？ ・思いを実現できる「場」がほしいということか？ーそう。 ・中高生が大人と話し合いができる場があるとよい？ ・できないことについて話すより「どうやったらできるか」を一緒に(大人と中高生で)話したい
広報・宣伝	・市から中高生に情報を伝えるのは難しい ・若い人は市報を見ない→中高生は何を見て情報を集めているのか？	・情報を発信しても、若い人は見えてくれない ・中学・高校で配られるチラシがよく機能している。→学校に所属していない人への広報は？
背景・アイデア	・一から作った方がおもしろそう ・自分たちで主催することによって自分の意見が言いやすい(通りやすい) ・自分たちでつくった方が自由に物事をできる。 ・企画力を養いたい ・"自分のアイデアを形にする"という経験をしてみたい ・自分たちが企画することでさまざまな人と出会ってつながりたい	・自分が企画したもので人が集まったり子どもたちが楽しんでくれるのがうれしい ・市には情報提供やイベント会場の場所を用意してもらいたい(運営は中高生のやりたい人を募集) ・市が定期的に場所を借りてイベントを開催して、ミニムサカツのようなイベントを考えるチームを募集する。定期的にすることでイベントの「習慣」がつく。

提案会来場者アンケート

- ・中高生がアイデアを実現するために、広報を大人が手伝うことが必要、メンター（大学生くらいのイメージ）が中高生と大人をつなぐ、学校で配られるチラシはよく見る、きっかけの入り口はリアルで皆で企画力をアップしていく講座などからだに参加しやすい、コミセンがもっと使いやすいと良い、などとても参考になりました。
- ・地域の社会教育のために中高生を中心としたイベントは地域を盛り上げるために有効だと思います。今あるイベントに中高生が参加できる「関わりしろ」を増やしていくだけで成立をすると思います。企画から広報までかわることができることで学びと交流につながると思います。
- ・学校以外に学校外の人たちと関われる機会を作ることは、特に現代では必要。いわゆる「学校生活」がうまくいかなかったり、悩んだりした際に、「学校」以外にも所属する場、人となつなげる場があると、引きこもり予防にもつながるのではないかと思います
- ・大人に与えられたことではなく、自分たちで考えて新しいことをしたい、ということが伝わってきました。
- ・中学生がコミセンの部屋を借りることができないという意見をきいて、中学生でも借りられるようにするか、中学生限定の部屋を設けるかする必要性を感じた。
- ・身近な商店街で、イベントや周知の企画を、中高生の皆さんから出してもらって、まちの人と一緒につくれるといいなと思った。
- ・課題と一定のツール（リソース）がわかり、それを受けてどう提案したいのか？今一步のところまで来ていますね！
- ・中高生の意見を活かすためには、窓口をわかりやすくすることが大切
- ・「Teens ムサカツ」の枠組み、プラットフォームをどう継続するか
- ・→運営発注してもらえたら結果を出せます
- ・→自走する仕組みを行政が本気で考えたいのであれば全体像・事業構造考えます
- ・食材はコミセン協議会等で用意し、調理や広報を中高生が担うというやり方で実現できそう。
- ・メンターとしての大学生の活用は実現できそう。市から呼びかけて募集するなど。
- ・場所については、市としても支援できそう。
- ・ぜひ実現する際には、自分たちのアクションを大切にしてほしい
- ・すぐ実現できる!やってほしい!と言うと誰もやらないので、「こんなことをやりたいのでやらせてください」と大人に相談しよう。
- ・商店街や街へ呼び込みたい方々を巻き込んで一緒に作ることで街に愛着を持ってもらう。
- ・コミュニティセンターは多世代交流の場である一方で、行政とつながりが希薄になる中高生世代と地域（行政）をつなぐ場となりうる。このことは、将来のコミュニティづくりにつながるものであり、中高生世代の方々にとっては、費用の負担なく気軽に集える場ともなりうる可能性をもつと考えたことによる。

提案会ポスターセッションのふせん記録

項目	ふせんの内容	
多世代交流	• 将来のためにいろいろな仕事をしている大人に話をきいてみたい(市役所の人) • 多世代交流で何を聞きたい？ - 趣味の話、バックグラウンド、自分にもってないもの！ • 多世代と交流して色々吸収したい。地域で同じ趣味を持つ人を自力で集めるのは難しい。 • 同世代同士の方が良かったりは？ - 育ってきた環境、話す人をえらぶ • 高齢のおじいちゃん・おばあちゃ	
地域からの協力	• 企画、運営、実行のプロセスを教えてほしい！ →商店街で実践も混ぜて教えられる！ • グリーンパーク商店街に具体的な企画を持ってきてくれれば…！ • 行政に「やってほしい」ではなく、中高生自身がやってみたいことを行政がサポートする形はどうか • 助言役を行政に手配してもらう！企画は自分たちで！ • 行政は困っているところに目がいく＋予算がいく傾向がある。学生に財政まわせる余裕はある？→ある！ • 他自治体の児童館にある「子ども委員会」みたいなしくみがあると	
広報・宣伝	• 中高生はどうしたら情報を見られる？ 一市報派！駅やプレイスなどに貼ってもらえると。SNSよりみるかな。 • SNSのチェックポイントは？ ーインスタ、表に出ているのは学生たち！ • 若者に流行らせてもらう。「バズ」において、行政はウラにいる。 • 大人向けのイベントも中高生向けに開放していくことで、多世代交流につながる。中高にチラシを配布するなどチャンネルを活用してよいと思う。	

居場所・空間	• 地域とのかかわりの「場」としては本来コミセンが担う部分が大きいはずだが、実情として中高生の使いやすい場としてはまだ不足していると感じた。 • 人とのつながりをつくっていく！行政ー地域ー学生	• 中高生の居場所、広いコミュニティ、確かに少ないよねー • 「居場所」昔は気にならなかった。今は問題視。"困っている"根拠。 • 何時に来ても帰ってもいい"空間"がほしい
背景・アイデア	• 地域食堂のお手伝いをしてみて、人と人のつながりを実感した。その輪をグリーンパーク商店街、市全体に広げたい。 • 今回は自分たちでアクションを企画したが、今後は参加する側が多くなると思う。 • このコミュニティで生きていきたいと思えるまちにしたい • コミュニティーを増やしたい。いろんな人(年代問わず)と関わりを持ちたい。 • 地域のことに関わると中高生だけでできることは限りがある。中高	• 生が地域に入っていける糸口がほしい。 • 何かを学ぶためのイベントではなく「交流」目的のイベントがあるといい • フラット行って、お菓子を食べながら好きな趣味の話とかしたい。アニメの話をちょい上の世代としたい。 • イベントをやるとして、運営側のスタッフの年代を若い人～大人までバラバラにすれば世代で孤立はなくなるのでは？

提案会来場者アンケート	
• 実現するリソースを提供できます。 • 中学生もInstagramはよく見る、ただ皆のタイムラインに流れる広報が必要と実感 • ワードウルフなどのゲームがあると話しやすい→場所や大人を集めるのは市、運営は中高生に任せてほしい、という気持ちが心強かったです。 • 既存のイベントの活用も可能だし、10代だけの小規模イベントはすぐに実現できる！ • 中高生向けのイベントは市として足りないところと思った。行政が入るとつまらなくなるんで、中高生の皆さんで企画して、各コミュニティ協議会に提案し、実現することにより、自己の成長やコミュニティづくりにつながると考えた。 • 中高生世代に限らないが、すでにある資源についても、どのように市民に知らせていくか検討が必要(中高生世代にもどうすると届きやすいかを	• 聞くべき) • 提案にあったように、学ぶ講座ばかりではなく、ゆるく集まっておしゃべりができる、編み物しながら多世代の人と話せる場が作れるといいなと思いました。対象年齢を固定的に考えてしまいがちでした。多世代、いいですね。 • 中高生の意欲的なモチベーションを活かさない手はないでしょう。ぜひ北コミセンと交流しませんか？ • SNSの活用は中高生の感覚をとらえていて良い • SNSを使うことで中高生にも親しみを持ってくれると思います。中高生向けイベントは確かに少ないと感じていました。具体的なアイデアがおもしろいと思いました。

項目	ふせんの内容	
「コミセン」への願い	・小中学生も部屋を予約できるようにしてほしい！ ・小中学生が使える時間を遅くまでにしてほしい！ ・中高生の意見も運営に取り入れてほしい ・部屋をネット予約できたらいいな(運営委員が高齢でムズかしいと…) ・コミセンが暗くて入りづらい。順番に改装工事が行われて「明るく」、内装も「白く」なると行きやすい。	
「商店街」への願い	・商店街でも自然(木や花)があると落ち着く ・商店街は歩き疲れるからベンチなどの椅子がほしい ・学生でも気軽に楽しめる商店街がいい ・利便性<ワクワク感！ 特に用事がある訳じゃなくともふらっと寄っているいろいろ見れるから楽しいと思う。 ・商店街の近くに駐輪場がほしい ・個人店だけでなくチェーン店もあると商店街に行くきっかけになりやすい ・お店を減らし、土地を一軒一軒広く使えば交流のできるスペースもできる ・外への発信が足りない？「お客さん」「お店を開きたい人」両方に届かない。 ・結局私たちの世代は何したらいいの？ ・中高生世代向けのイベントやお店があるといい。お店を開くには市からの補助金などがあれば一歩踏み出せない人の手助けになる。 ・小学生～保護者に向けた商店街全体をめぐることができるイベントを開催する？ ・常に多くの店(明るさ)がないと、治安に対しての不安感を覚える。	

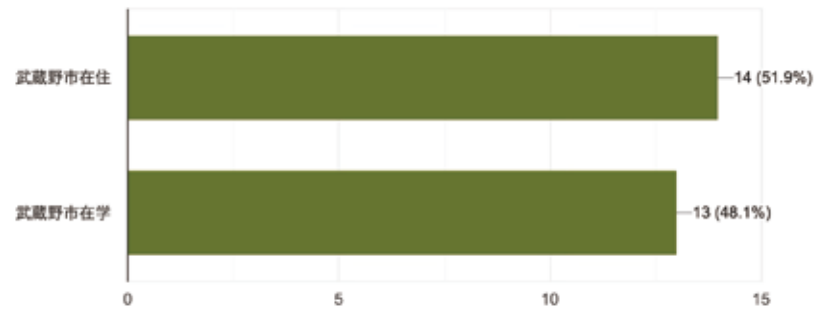
※ 最終的な市政提案にはのらなかった参加者の声を、運営事務局で整理をして紹介する。

項目	ふせんの内容	
同世代・大人と交流したい	・同じ夢を持った人と集まって交流してみたい ・同じ夢を持っている人と(関連する職場などを)体験しに行ってみたい。そういう場所がほしい。 ・ムサカツみたいに、初対面の人とゲームをする機会があったらいい。 ・「気軽に人としゃべれる場」がほしい！ 同世代とも話したいし、大人とも話したい。 ・大学生くらいの人たちと話す機会がほしい ・大学生くらいの憧れのセンパイみたいな人がほしい ・目標がほしい ・同じ夢を持っていた先輩の話を聞いてみたい。大学生とか。 ・農家さんとか社会に必要な不可欠な人のことを知りたい。 ・自信の意見に対する大人からのフィードバックがほしい。	

本事業の参加者を対象に最終回に「総まとめ振り返りアンケート」を無記名で実施した。最終回答者にはオンラインフォームで回答を依頼し、32 名の全参加者のうち 27 名が回答した。以下、回答結果を掲載する。

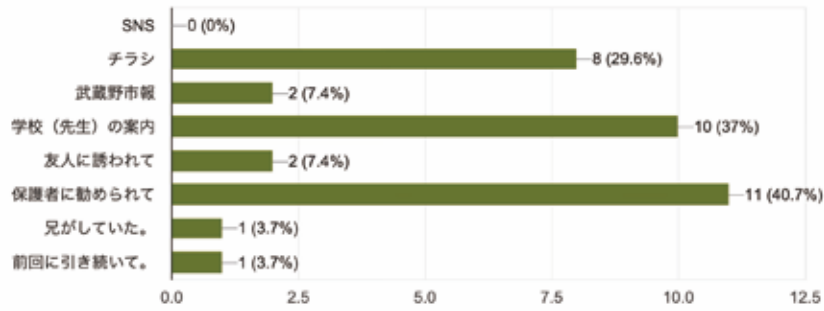
あなたの属性を教えてください①

27 件の回答



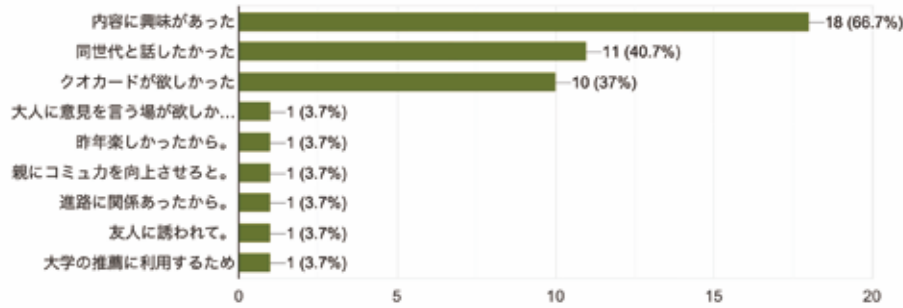
今年度のTeensムサカツの開催はどこで知りましたか（複数回答可）

27 件の回答



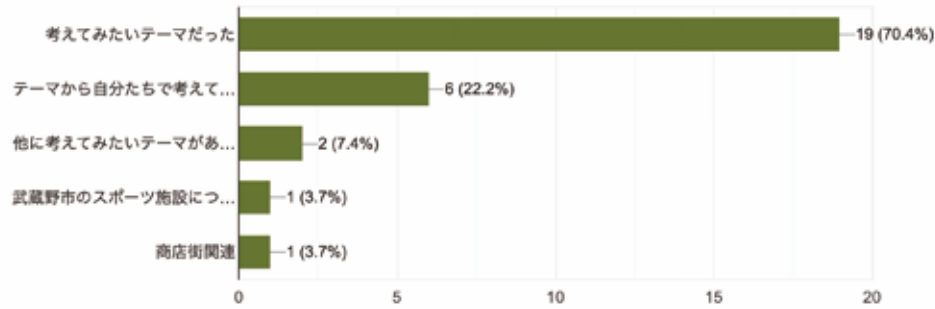
参加動機を教えてください（複数回答可）

27 件の回答



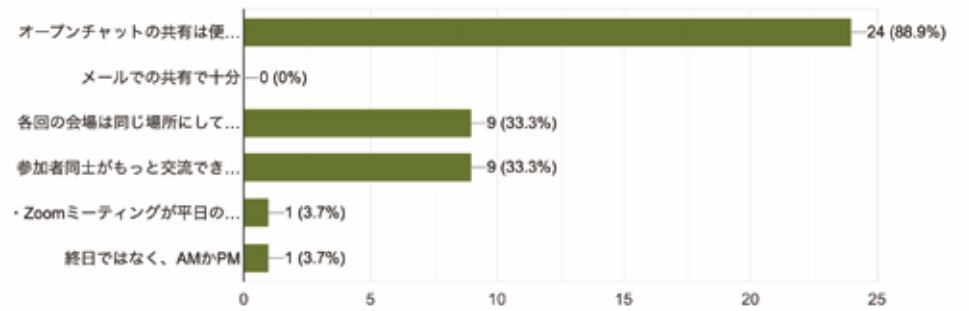
テーマ設定「こんなまちになったらいいな'を市政に」について（複数回答可）

27 件の回答



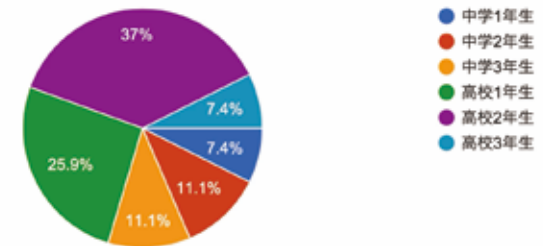
その他、連絡方法や会場などについて（複数回答可）

27 件の回答



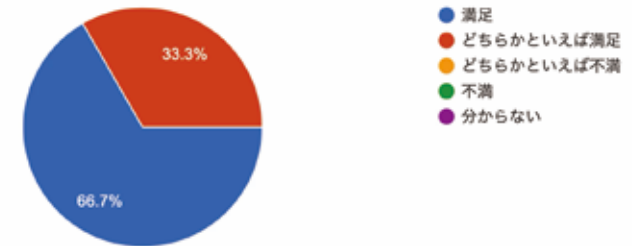
あなたの属性を教えてください②

27 件の回答



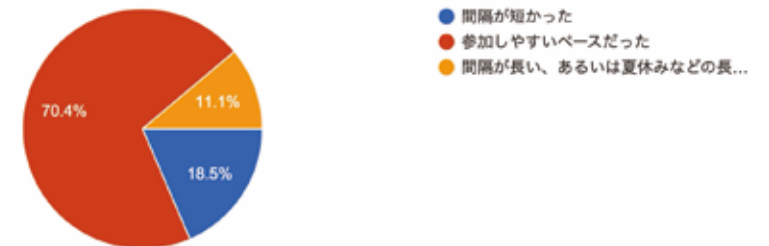
2024年度ムサカツ（全6回）の満足度を教えてください

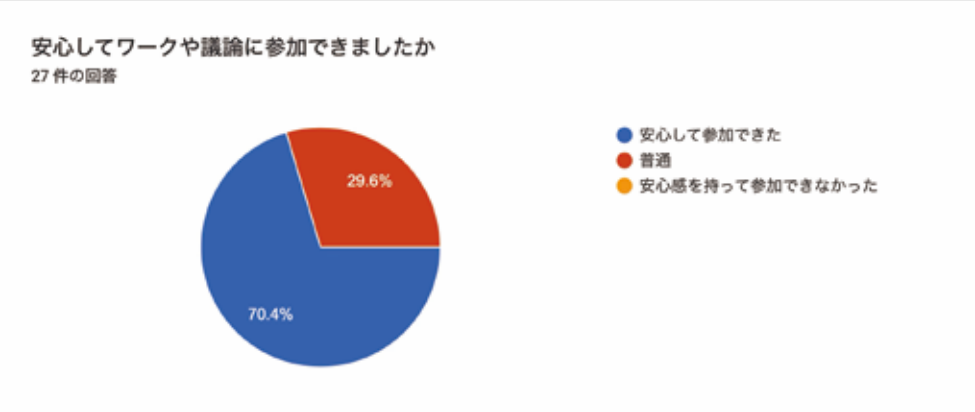
27 件の回答



各回の間隔（期間）について（今年度は3ヶ月間で全6回+a）

27 件の回答

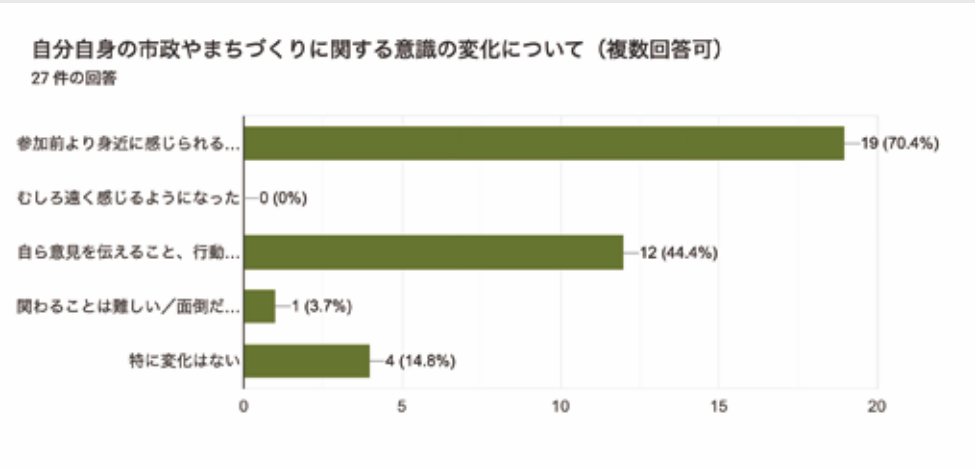




『安心してワークや議論に参加できたかどうか』の選択について
可能であれば理由も教えてください

- ファシリテーター、大人たちがそう言う空気を作ってくれた
- 元々人見知りなため。
- ファシリテーターの方が優しくかったから。
- みんな優しくかったから。
- 友人がいたため。
- 自分だけからまわっている感じがあった。
- 思っていたよりテーマが難しくなかったから。

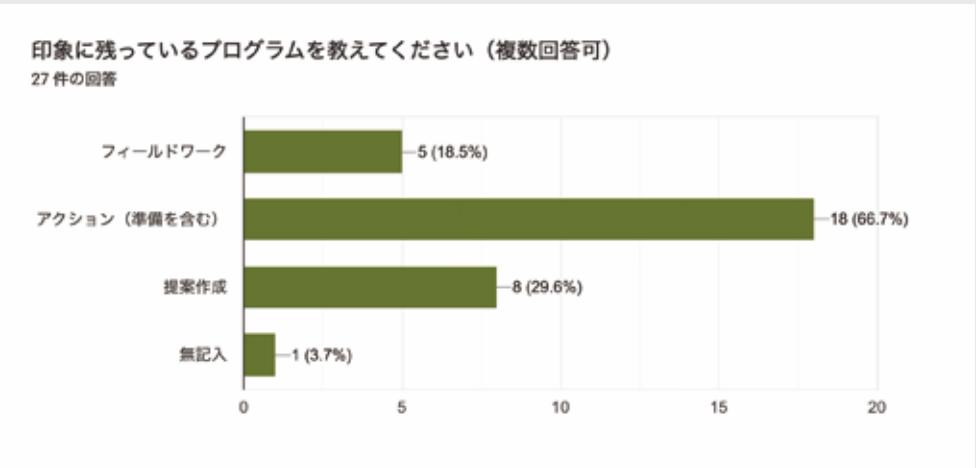
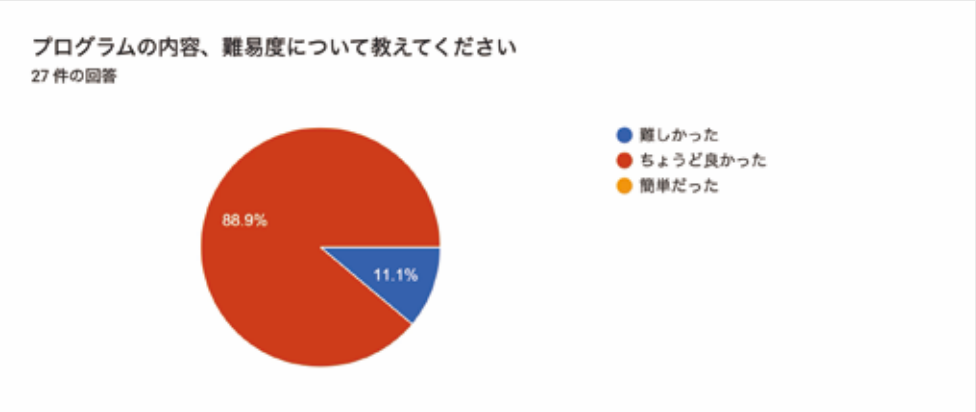
- ファシリの方がサポートしてくれたから。
- ファシリの方々のおかげで緊張せずに済んだから。
- グループのみんなが優しくかったから。
- 自分が言った意見が相手にどう受け取られるか分からなくて少し不安だったから。
- 知らん。話しやすかった。
- 全員が真剣に取り組んでいた。
- 友達ができたから。
- 最初は緊張していたが、たのしく話し合いができました。



『自分自身の市政やまちづくりに関する意識の変化について』の
選択について可能であれば理由も教えてください

- グリーンパーク商店街について前から知っていたけど、行ったことがなかった。今回で知れたし、今後も機会があれば行きたい。
- 発表・プレゼンをして重要性を理解してもらえたから。→行動してもらったところまでもっていきたい。
- 市長のフットワークの軽さや運営の手厚さを感じ安心した。
- 市長が祝日にもかかわらず来たから。
- 昨年よりも提案を理解してくださったことは嬉しかったが、まだ伝わらない点もあったので来年以降もよりアイデアが伝

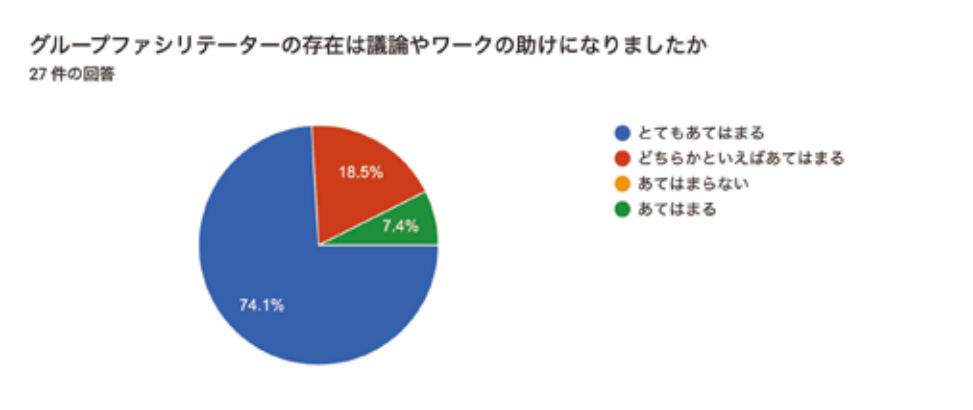
- えやすい方法を探していきたい。現在の私に全くと言って良いほどない社交性を磨きたいです。
- 市長の話を聞くことができたから。
 - 元々、市政提案やまちづくりの活動をしていたため。
 - 商店街に抱いていたイメージと実際の様子が違ったから。
 - 市長さんなどが最後に中高生の居場所をもっと作ろうと言ってくれていたから。
 - もともとだけど、政治ってめんどろうと思った。
 - こうして話す機会があることで形になるという希望が持ててとても良い。
 - 実際市政に意見を伝えてみて、けっこう真剣に受けとってくれた大人が多かったから。



難易度、印象に残っているプログラムについて、
選択理由も教えてください

- グリーンパーク商店街でイルミネーションをした時にたくさんの小学生と話したのが楽しかったし良い思い出になった。
- 僕は出席できたりできなかったりでしたが一番印象的なのは話し合いでしたね。こうするにはこうしようなどの試行錯誤をみんなでするのは好きでした
- アクションをして、ある程度明確になった自分の考えを提案作成によってさらに明確で深いものに出来たことが自分にとって一番の経験になったと思うから。また、ファシリの方々の自分たちには無い視点に触れ、より自分の世界が広がったと思うから。
- 「どうしたら伝わるか」も重要だったが、「どうしたら行動・実現してもらえるか」も重要だと思ったから。
- 1人で考えるには少し難しかったが、グループで話し合うことができたのでちょうど良かった。具体的な提案を考えるのが楽しかった。
- アクションがいきなり始まったので難しかった。
- 楽しかったから。
- クラフトスタジオを使って、パイを作れたこと。
- アクションで大学生や社会人の方からお話を聞け、進路選択の参考になった。
- 提案作成時、合流した新しいメンバーの方とも仲良く協力でき、とても楽しかった。
- スライドを作成すると言われてパワーポイントで作るのかと思ったら全く違ったから。
- 知らない同世代の人にアンケートをしてもらえるように交渉

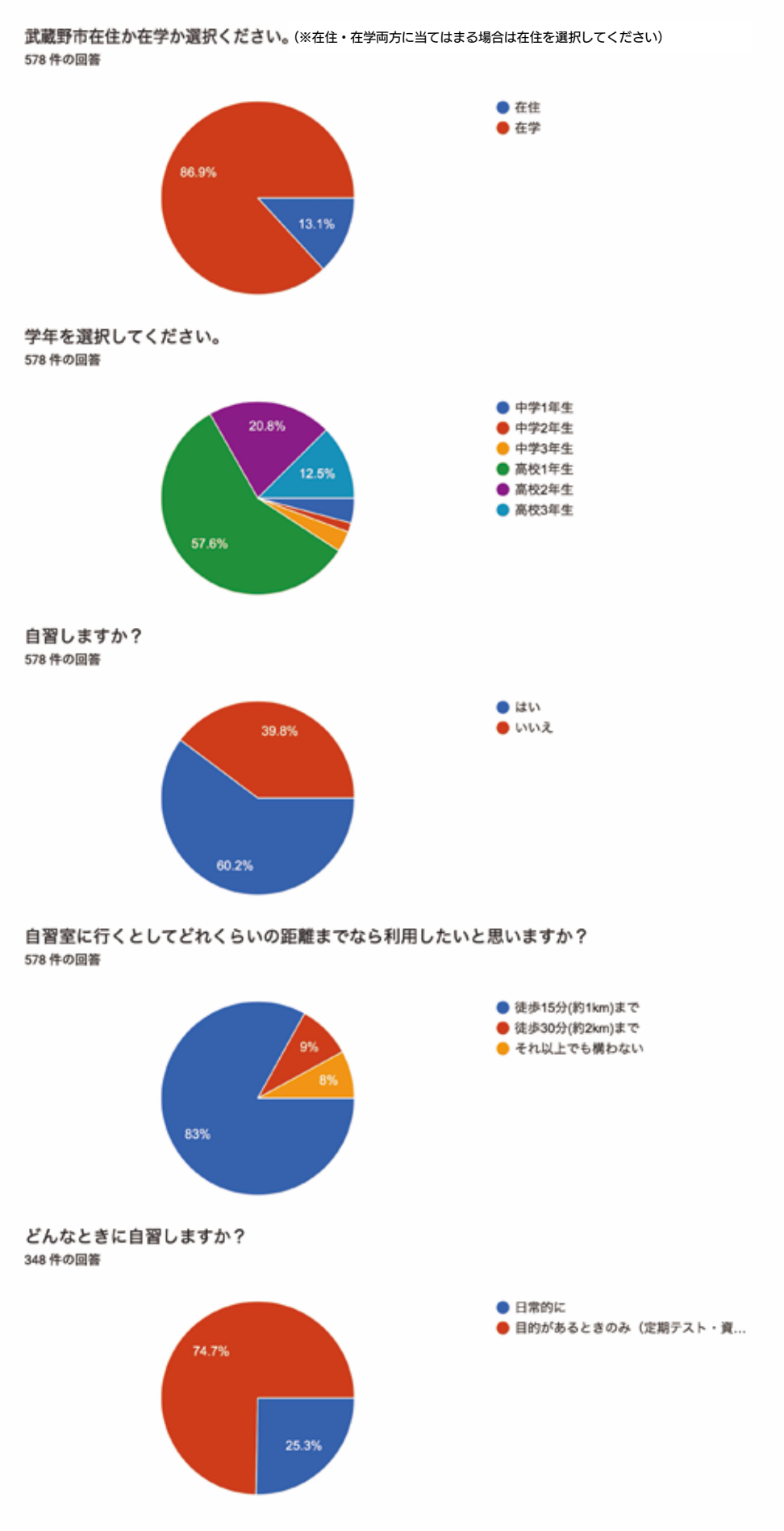
- をしたことが難しかったが、楽しかった。
- 良い。自分たちの提案をうまくまとめられた。
 - 難易度については、自分も興味があるテーマであることもあり、ちょうど良かった。また、印象に残っているプログラムについては、やはり実際にアクションをおこして人と関わったことであろう。
 - アクションは思うように満足するまで準備ができなかった。
 - 市政提案ということで、提案内容にお金がかかってもかからなくても良いということでちょうど良い内容だった。アクションは楽しかったため、印象に残っている。
 - 自分たちで企画・運営できたから。
 - グリーンパークで行ったアクションは印象に残っています。
 - 色々な年齢の人と話せて楽しかった。
 - スタッフの人数が少なくて最初は不安だったけれど、参加者の方々がみんな優しくて武蔵野市民の温かみを感じられたから。
 - 他の人間と関われたこと。理由→俺の脳に聞いてください。（わからない）
 - 実際に実地で動いてみることでその場の人の想いや実情に触れられたのが良かった。
 - 各自の案を持ち寄ったから。
 - 大人から話を聞くとき。
 - アンケートを自分たちで声かけにいくとき、一番キツかった。
 - 難易度としては、自分の意見を述べやすかったから。アクションでは、自分たちが主体となって行動していたから。
 - 実際に地域食堂に行って手伝いをし、お客さんの思いを知ることができたのはとても印象に残っているから。

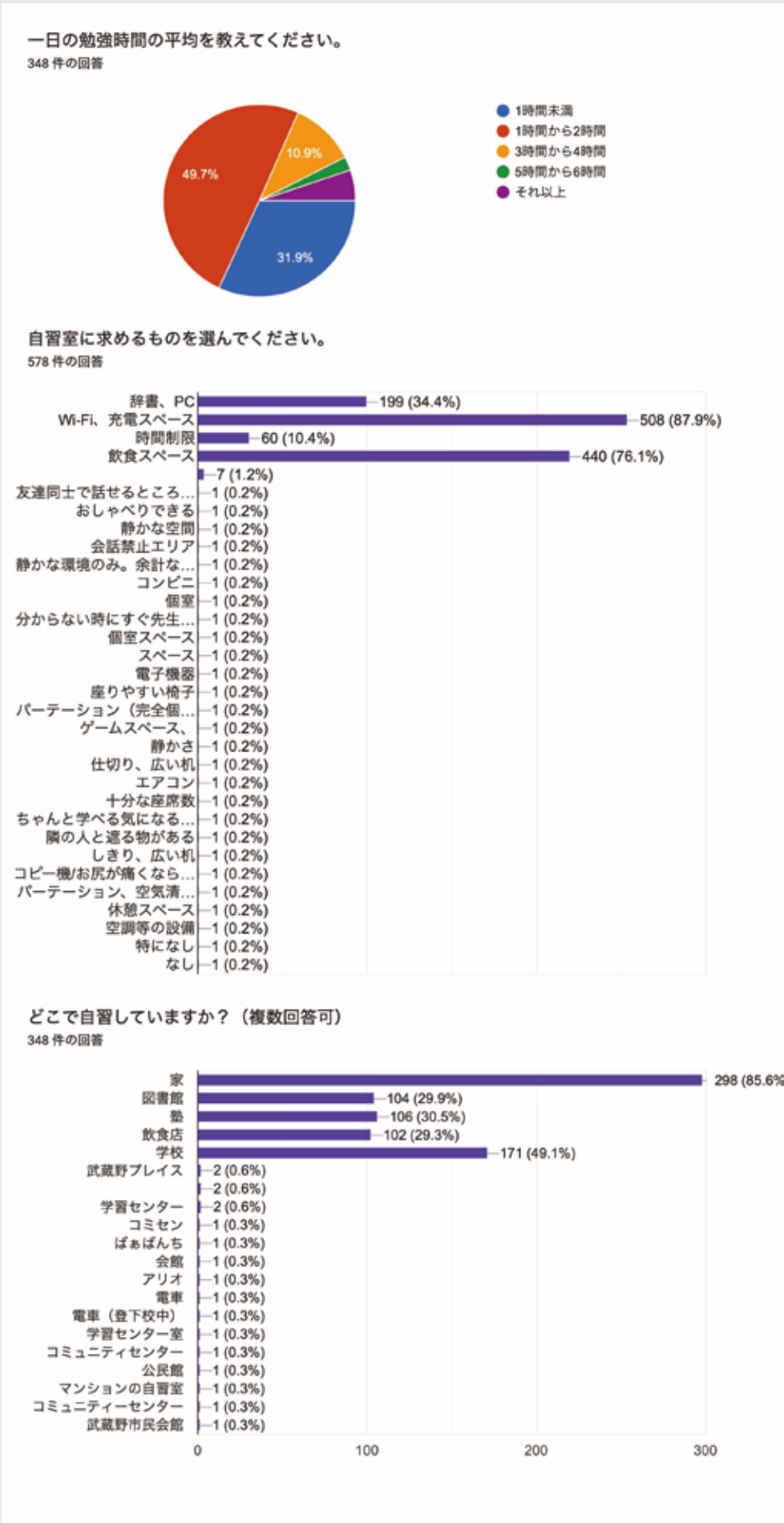


『グループファシリテーターの存在は議論やワークの助けになりましたか』の選択について可能であれば理由も教えてください

- 優しくった。
- つまりそうになったらしっかり物事をいい方向に運んでくれた
- 提案作成の際の心理学的視点からのアドバイスがとても興味深く、参考になったから。
- 大人の意見はある程度の現実味があって大事だと思うから。
- とてもフレンドリーだったので話しやすかった。
- グループワークを先導すると反感を買うのではと思い遠慮していたので、そのような役割の人がいて助かった。
- 必要不可欠だった。
- 話が脱線したり、行き詰まったときに話をまとめてくださったり、新しいアイデアにつながる意見を出してくださって助かった。また、私自身人見知りでメンバーで話すのが最初とても怖かったので、架け橋になってくださりありがたかった。
- 意見を出すときのヒントになったから。
- 自分たちの意見をまとめてくれるから。
- 話の流れにのりやすかったから。
- 進行の助けにはなってくれたが、たまに話を戻されてしまい、進行のスピードが落ちてしまうこともあったため。
- ファシリがいなければ市政提案が出来なかったと思うから。
- 優しく声をかけてくれたから。
- 皆んなの話し合いが止まってしまったときに話題提起などをして助けてくれたから。
- 良い人類だった。
- 行き詰まった時に手助けになった。いいアドバイスをくれた。
- 困った時には声を掛けてくれたこと。
- 自分たちだけであれば、行動をせずに意見を出し合うくらいしかできなかったと思うから。
- 私たちが意見につまったとき、さりげなくサポートしてくれたから。

今年度「アクション」の一つとして実施した自習ニーズに関するアンケート調査の結果を掲載する。
対象や中高生世代で、実施期間は2025年1月11日(土)～31日(金)の約3週間、578名から回答を得た。(アクションの概要は17ページ)





希望することがあれば自由に記述してください。

- 静かな環境が欲しい
- 静かな環境
- 静か
- 寝れるところ
- 静かな環境、机上照明、十分な席数が欲しい。
- また、稀に独特の臭いがこもっていることもあるため、消臭ビーズや芳香剤があると嬉しい。
- 充電スペースや Wi-Fi もあると良いが制限時間などが決められていないほうが利用しやすい。
- 静かな場所 集中しやすい環境
- カフェミたいな自習室が欲しい
- 集中できるところ。
- 静かな場所
- 冷暖房がしっかりしている場所
- 明るいところ
- とにかく勉強していい場所が欲しい
- 友達と勉強しながら話してもいいスペースと1人で勉強する会話禁止のスペースで区別して欲しい
- うるさくする人がいないでほしい
- 聞きに行ける人が欲しいです。また、仕切りがある、疑似個人スペースのような形態だと利用しやすいです。
- 静かな環境、空調整備、傘立てが欲しいです
- 静かな場所が欲しいです。
- 女性限定がいい、先生がいるなら先生も女性
- 隣との隔たりがある机
- おもしろくてわかりやすいひと
- 気軽に質問できる人が欲しい
- いつ行っても絶対席に座れる方がいい
- 一人一人区切られた席が欲しい。友達と話せるようなスペースだと喋り声が気になって集中できない
- 自由に自習ができる空間がいい
- 教えてくれる人
- 個室感が欲しい
- 静かな空間
- どのように自習したいかに合わせて部屋を分けて欲しい
- 教えてくれる大人が欲しい
- 咳エチケットに配慮した機の配置
- 静かがいい、壁があるといい
- 机ごとに仕切りが欲しいです
- 静かであること
- 静かで自由な感じがいい
- 教えてくれる大人がいて欲しい
- 印刷機がほしい
- 赤本とか教本等ほしい
- 隣の人との壁
- 飲食しながら自習をしたい。
- 座席が多いとありがたい
- 集中できるスペースがほしい
- 一対一で教えてくれる大人
- 緑があった静かな環境が欲しい
- ドリンクバー
- 売店があると助かります
- ゲーセン
- どの教科も教えてくれる大人が欲しい
- 指導してくださる先生があると嬉しいです。
- 寝ている人のいびきがうるさいので、それに対するシステム
- その教科が得意な人に教えてもらいたい
- 静かな自習室とかはぶっちゃけ図書館などにもあるので違うタイプの騒げる感じがいいです
- ブースのような狭い空間で勉強できる環境がいい
- 特になし
- 学生専用で入りやすい空間ならとても良いと思います。
- 1人ずつの仕切りが欲しい
- うるさくならないように年齢制限をしてほしい
- 無料のコピー機
- 質問できる環境、遅くまでやっていて欲しい
- とくになし
- 飲食ができる
- inゼリー(ラムネ味)
- 仕切りのある自習室
- 教えてくれる大人が欲しいです。
- 個人スペースが欲しい、1人で勉強できる部屋が欲しいと思う
- うるさいところがいい
- 仕切りほしい
- 友達と喋れる
- 個人の環境(プライベートスペース的な)が守られていてほしい
- 自販機がほしい
- チューターさんがいると、わからないところもその場で解消できるので良いと思います！
- お金がかからない自習室、せめて中高生が来やすい値段で欲しい
- スマートフォンなどの電子機器を預けられる場所を熱望している。そうすることで集中力が高まると思う。
- 教材を置いてほしい。
- お菓子の自動販売機が欲しいです。
- 完全個室のスペースがあったらいいと思います
- 個室
- 程よい騒がしさ
- できれば赤本や普段手に取らない参考書などがあると自習室に持っていく荷物が少なくて済む
- 料金が安い
- 静かな環境が欲しい。
- 静かで、教えてくれる先生が多い方が良い
- 来年度受験生になるので、もし作るのであればできる限り早めにとって欲しいです
- 特にない
- 静かなとこ
- ないです。
- 数学などのわからない単元について、教えられる先生を増やして欲しい。
- 大学生がいてくれたら心強い
- 環境

令和6年度
武蔵野市 中高生世代ワークショップ Teens ムサカツ 事業報告書

発行日 令和7年3月
発 行 特定非営利活動法人 文化学習協同ネットワーク
〒181-0013 東京都三鷹市下連雀1-14-3
TEL 0422-47-8706 ／ FAX 0422-47-8709

一部写真提供:武蔵野市
※ 本事業は特定非営利活動法人文化学習協同ネットワークが武蔵野市の委託を受けて実施しました。

利便性

現状

進路の話、友人関係
自分の話を多世代
の人に聞いてほしい!!

多世代で楽しめる

イベントがたくさん
欲しい!!

否定しないで

良いところを
のばす環境

運営

職業を選ぶときに

意識して良かったと

思うことを聞きたい!

進路選択~

発行

特定非営利活動法人
文化学習協同ネットワーク

願望

中高生で所(女子大)

運営にしたい

☆街の活性化×スポーツ

ニスポーツをビジネスに

中高生の活動や

情報を知れる

SNS(インスタなど)

進路

並行して

話せない人とも

友達と
遊べる場

理想は... 高校生...
利用できる

施設がほしい

話

否定しないで

良いところを

のばす環境

運営

職業を選ぶときに

意識して良かったと

思うことを聞きたい!

進路選択~

発行

特定非営利活動法人

文化学習協同ネットワーク

話せない人とも

並行して

話せない人とも